雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
活　動　日　誌

〔活動日〕 平成 19 年　8 月　11 日（ 土 ）午 後　13 時　30 分 から
午 後　16 時　45 分 まで

施　設　名	チェリヴァホール	
プ ロ グ ラ ム 名	名人によるそば打ち交流会	
内　容	講師に指導してもらいながら、そば打ちを体験し、自分達で作ったそばを、レストランでゆでてもらい、みんなで食べました。	
（使用した教材）	そば打ちの手順資料（作成）	
参加者数	（子どものみ）　12 名	
内　訳		小学校1～3年生　4 名
		同　4～6年生　8 名
		未就学児　名
		中学校生　名
		その他（保護者など）　4 名
講師・コーディネーター氏名	松本道義	
ボランティア（含職員）氏名	滝村聡子	吾郷雄太・陰山義広
安全管理人氏名	岡村八重子	
参加者・保護者の感想	「面白かった」「おいしい」という声が多く、保護者の方々も「いい体験をさせてもらいました」「おいしかったです」と言われました。	
特記事項 （講師の感想・意見・要望。事故・怪我は必ず記入）	教材製作は刃物等で怪我の恐れがあり、安全面から講師、安全管理人で製作し、子どもは見学とした。また、本日は大東町内の小学校児童は「身障者車椅子バスケットボール体験事業」と重複し参加がなかった。	

名人によるそば打ち交流会/チェリヴァホール　　8/11

名人の指導のもと、
そば打ちに挑戦です。

作り方を
よく読んで・・・

みんなで作ったおそばは
すごくおいしかったです。

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
活　動　日　誌

〔活動日〕 平成 19 年　8 月　13 日（ 月 ）午 前　8 時　0 分 から
午 後　4 時　0 分 まで

施　設　名	フィールド		
プ ロ グ ラ ム 名	食「米を考える　山王寺棚田と野外炊飯体験」（大東）		
内　容	山王寺棚田ウォーキングと見学 須我神社見学 野外炊飯体験 水遊び		
（使用した教材）	食材・薪・炭・調理器具・食器		
参加者数	（子どものみ）		28 名
内　訳		小学校1～3年生	19 名
		同　4～6年生	6 名
		未就学児	3 名
		中学校生	0 名
		その他（保護者など）	9 名
講師・コーディネーター氏名	榎本矩子 安倍善明 漆谷容子 宮迫勝美	加藤尚子	
ボランティア（含職員）氏名	加藤雄二　錦織慎司　山崎延男　岸野俊一　陰山義広　小林有希子　滝村聡子		
安全管理人氏名	広田績　加本勝　畑広三　佐野成治		
参加者・保護者の感想	子どもたちを主体にした食事作りや片付けなど大変良かった。 たくさん友達ができて、楽しいツアーだった。 棚田を初めて見ました。美しい風景でした。次世代に送りたい。 川遊びがとても楽しかった。笹舟を作って流しました。水がきれいでした。 田んぼがジュータンのように広がっていて、風が吹いたら波のようでした。		
特記事項 （講師の感想・意見・要望。 事故・怪我は必ず記入）			

食「米を考える　山王寺棚田と野外炊飯体験」/フィールド　　8/13

自然がいっぱい、
天気もよく
素晴らしいバスツアーに
なりました。

野外炊飯に挑戦。
友だちと協力して
作りました。

食後は　川辺で
水遊びをしました。

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
活　動　日　誌

〔活動日〕 平成 19 年　8 月　19 日（ 日 ）午 後　1 時 00 分 から
午 後　3 時 00 分 まで

施　設　名	雲南市加茂文化ホールラメール		
プ ロ グ ラ ム 名	キッズ・ミュージカル		
内　　容	自己紹介 ストレット、簡単なステップ（タッチステップ、ボックス） 振り付け指導 今後の課題提示		
（使用した教材）	CDデッキ		
参加者数	（子どものみ）		19 名
内　　訳		小学校1～3年生	13 名
		同4～6年生	3 名
		未就学児	2 名
		中学校生	1 名
		その他（保護者）	16 名
講師・コーディネーター			
ボランティア・職員（氏名）	小林有希子	陰山義広	
安全管理人（氏名）			
参加者・保護者の感想	初めてダンス挑戦したが、優しく指導してもらい楽しくできた。/他の学校の友達ができた。		
特記事項（事故、怪我等があれば必ず記入すること。その他、講師の意見要望、感想等も）	ダンス初心者も数名いたが、踊ることやステップへの抵抗が少なく、すんなりと進むことができた。また、教室内も親同士、子ども同士のコミュニケーションも多く、楽しい教室になった。		

キッズ・ミュージカル/雲南市加茂文化ホールラメール　　8/19

まずは、基本のステップから・・
タッチステップ、ボックスの練習です。

振り付けの練習も、
しっかりと、
やさしく指導して
もらいました。

音楽にのって、
みんなでミュージカル
気分です。

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
活　動　日　誌

〔活動日〕 平成 19 年　8 月　22 日（ 水 ）午 前　10 時 00 分 から
午 後　12 時 00 分 まで

施　設　名	古代鉄歌謡館		
プ ロ グ ラ ム 名	こども和太鼓教室		
内　容	打ち方の基本 練習曲の合奏		
（使用した教材）	太鼓（大、中、小、8個）　ばち		
参加者数	（子どものみ）		9 名
内　訳		小学校1～3年生	7 名
		同　4～6年生	2 名
		未就学児	0 名
		中学校生	0 名
		その他（保護者など）	6 名
講師・コーディネーター氏名	赤名卓大(炎太鼓)		
ボランティア（含職員）氏名			
安全管理人氏名	熱田慎次	谷本　登	
参加者・保護者の感想	初めて太鼓を演奏したが、とても楽しかった。（子ども）/子どもが楽しんでやっているので、次回からも参加させたい。（保護者）		
特記事項 （講師の感想・意見・要望。事故・怪我は必ず記入）			

子ども和太鼓教室/古代鉄歌謡館　　8/22

みんなで和太鼓に挑戦。
まずは打ち方の基本から
練習しました。

初めての子どももいたけど
みんな上手にできました。
とっても楽しかったです！

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
活　動　日　誌

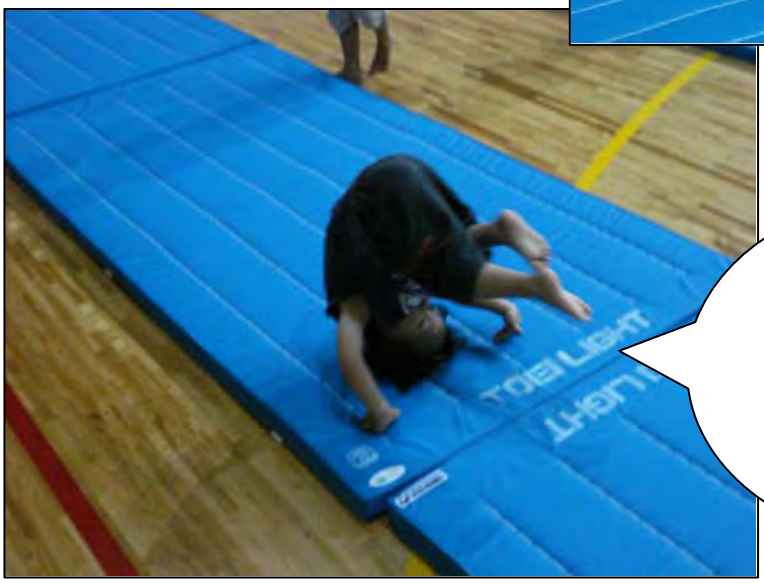
〔活動日〕 平成 19 年　9 月　30 日（ 日 ）午 後　2 時　0 分 から
午 後　4 時　30 分 まで

施　設　名	三刀屋文化体育館アスパル	
プ ロ グ ラ ム 名	「 アスパル体操教室」	
内　容	前転と後転を体験。今後は少しづつ技を増やして側転や倒立前転にチャレンジしたいと思う。しかし、「楽しくマット運動に親しむこと」が重要なので、おにごっこやゲーム的な遊びを随時取り入れて今後も活動したい。	
（使用した教材）		
参加者数	（子どものみ）　7 名	
内　訳		小学校1～3年生　5 名
		同　4～6年生　名
		未就学児　2 名
		中学校生　名
		その他（保護者など）　1 名
講師・コーディネーター氏名		
ボランティア（含職員）氏名	原　恵介	神田陽二
安全管理人氏名	谷本　登	
参加者・保護者の感想	側転やバック転をやってみたい。後転が難しいので練習したい。（子ども）/家で前転をする場合、布団の上なので実際にマットの上で体験できて大変良い（保護者）	
特記事項 （講師の感想・意見・要望。事故・怪我は必ず記入）	休憩・水分補給は随時取り入れること。参加者の体調を気にかけ、問いかけるようにすること。	

アスパル体操教室/三刀屋文化体育館アスパル　　9/30

今日はマット運動に
挑戦
まずはみんなで
みみをしまいましょう。

みんな
上手にできるか～？



前転が
上手にできるように
なったよ！

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
活　動　日　誌

〔活動日〕 平成 19 年 10 月 20 日（ 土 ）午 後　1 時 00 分 から
午 後　3 時 00 分 まで

施　設　名	大東公園市民体育館	
プ ロ グ ラ ム 名	親子エアロビクス教室	
内　容	エアロビクス教室2回目。前回より少しハードな動きだったけど、子ども達はリズムに乗り楽しそうに活動していた。途中休憩もとり、最後にはきちんと整理体操をされるので体が痛くないと高齢の保護者（祖母）にも好評です。	
（使用した教材）		
参加者数	（子どものみ）　35 名	
内　訳		小学校1～3年生　6 名
		同　4～6年生　11 名
		未就学児　3 名
		中学校生　15 名
		その他（保護者など）　11 名
講師・コーディネーター氏名	栗　玲子	
ボランティア（含職員）氏名	三原　英男	藤原　陽子
安全管理人氏名		
参加者・保護者の感想	ぼくはエアロビクスをやって少し体がやわらかくなりました。今度の教室が楽しみです。ステップを覚えるのが大変だったけど、ステージの上で栗先生がやってくれたのでだんだん見ていくにつれて上手になっていってよかったです。いつもは汗が出ないけど、一生懸命やったやったのでとても汗が出ました。	
特記事項 （講師の感想・意見・要望。事故・怪我は必ず記入）	講師の方の感想・・・もう少し保護者の参加があるといいですね。スポーツが苦手な子ども達、運動不足のお父さんお母さんも気軽に参加してほしいです。今回参加した子どもたちもちょっと照れながらやっていました。次回はもっとはじけてほしいです。	

親子エアロビクス教室/大東公園市民体育館　　10/20

みんなで
エアロビクスに挑戦です。

ステップにのるのは
少し難しいけど
いい運動になります。

一生懸命体を
動かして
いい汗をかきました。

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
活　動　日　誌

〔活動日〕 平成 19 年 11 月 3 日（ 土 ）午 前 10 時 00 分 から
午 後 13 時 00 分 まで

施　設　名	ラメール（かもてらす・栄養指導室及び研修室）		
プ ロ グ ラ ム 名	親子お料理教室　雲南の食材をレシピに		
内　　容	（株）まめやから講師3名を招いて、雲南の食材を使ったクッキング教室を開催。 メニュー①里芋のカレー ②柿とかぶのピーナッツ和え ③まめやのトルティーヤ ④オレンジ味の飲むヨーグルト 1テーブルで一つの料理に挑戦して頂く。 調理時間 10:20～11:30 試食・交流時間 11:30～12:10 片付け 12:10～12:30		
（使用した教材）	かもてらすの調理用具・栄養指導室、健康福祉センターの皿などの備品及び先生が用意された食材5，000円分（請求書別添の通り）		
参加者数	（子どものみ）		10 名
内　　訳		小学校1～3年生	4 名
		同4～6年生	2 名
		未就学児	4 名
		中学校生	名
		その他（保護者）	8 名
講師・コーディネーター	榎本矩子 漆谷容子 遠藤菜々		
ボランティア・職員（氏名）	吾郷和枝		
安全管理人（氏名）	土江進		
参加者・保護者の感想	○普段、子どもと一緒に料理をする時間が無いので、この機会に一緒に作れてよかった。○変わった食材（普段あまり料理に使わない食材・・・柿など）を使って思わぬ料理法を教えてもらい参考になった○意外に簡単に作れて、楽しく美味しい時間を過ごさせて頂き、ありがとうございました。		
特記事項（事故、怪我等があれば必ず記入すること。その他、講師の意見要望、感想等も）			

親子お料理教室/雲南市加茂文化ホールラメール　　11/3

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
活　動　日　誌

〔活動日〕 平成 19 年 12 月 15 日（ 土 ）午 前 10 時 30 分 から
午 後 12 時 00 分 まで

施　設　名	雲南市加茂B＆G海洋センター		
プ ロ グ ラ ム 名	ミニバスケットを始めよう！		
内　容	ランニング3周 ストレッチ・体操 ハンドリング シュート 試合		
（使用した教材）	ボール		
参加者数	（子どものみ）		11 名
内　訳		小学校1～3年生	2 名
		同　4～6年生	9 名
		未就学児	名
		中学校生	名
		その他（保護者など）	1 名
講師・コーディネーター氏名			
ボランティア（含職員）氏名	速水久樹		
安全管理人氏名	廣田績		
参加者・保護者の感想	子ども：体操や柔軟で体が硬かったので、家でも少しやってみようと思った。シュートがたくさん入って楽しかった。		
特記事項 （講師の感想・意見・要望。事故・怪我は必ず記入）	これまでになく雲南市内から沢山の児童の参加があり楽しく教室ができた。体の硬い子どもが結構いたので、家でも柔軟を続けてもらえるといいと思った。最後は試合ができたので子どもたちも楽しかったと思う。		

ミニバスケットを始めよう/雲南市加茂Ｂ＆Ｇ海洋センター　　12/15

まずは基本の
ドリブル練習です。

シュートの構え方を
指導してもらいました。

かっこよくシュート!!

入るかな？

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
活　動　日　誌

〔活動日〕 平成 20 年　1 月　27 日（ 日 ）午 前　10 時 00 分 から
午 前　12 時 00 分 まで

施　設　名	三刀屋文化体育館アスパル	
プ ロ グ ラ ム 名	「アスパルスポーツ広場」	
内　容	今回のスポーツ広場は、「キンボール」にチャレンジ。正式なルールで行うには人数が少なく、少人数でも出来るキンボールを使った遊びをした。まず、ペアでキンボールを転がし、目標物をタッチして戻るリレーをし、体が温まったところで区画を制限してキンボールを使った鬼ごっこをした。キンボールに触れたら鬼が交代するルールである。常に走り回るので、額に汗が出るほどしっかり動けた様子だった。次回はキンボール単独のプログラムを企画する。	
（使用した教材）	キンボール用具　2基	
参加者数	（子どものみ）　6 名	
内　訳		小学校1～3年生　3 名
		同　4～6年生　名
		未就学児　3 名
		中学校生　名
		その他（保護者など）　2 名
講師・コーディネーター氏名	妹尾幸二	
ボランティア（含職員）氏名	神田陽二	
安全管理人氏名	畑　広三	佐野成治
参加者・保護者の感想	大きな玉でビックリした。学校でやった事があったけど、アスパルの広い場所で出来てよかった。	
特記事項 （講師の感想・意見・要望。事故・怪我は必ず記入）	休憩を随時取り入れること。参加者の体調を気にかけ、問いかけるようにすること。	

アスパルスポーツ広場/三刀屋文化体育館アスパル　　1/27

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
活　動　日　誌

〔活動日〕 平成 20 年　2 月　16 日（ 土 ）午 前　10 時 00 分 から
午 後　12 時 00 分 まで

施　設　名	ラメール（かもてらす大会議室）		
プ ロ グ ラ ム 名	ハーブに親しもう		
内　　容	リースで作る携帯ストラップ ハーブの会の事業とドッキングで開催のため参加人数が多く、わくわくプログラムの参加児童も驚いていたが、世代間交流にもなりよかったと思う。 作業時間　10:20～11:00　交流時間　11:10～11:40 片付け　11:40～12:00		
（使用した教材）			
参加者数	（子どものみ）		7 名
内　　訳		小学校1～3年生	6 名
		同4～6年生	1 名
		未就学児	0 名
		中学校生	名
		その他（保護者）	43 名
講師・コーディネーター	高橋洋子 荒木繁子		
ボランティア・職員（氏名）	長谷京子		
安全管理人（氏名）	遠藤英明		
参加者・保護者の感想	慣れない針作業で悪戦苦闘でしたが、短時間でできあがった携帯ストラップに喜んでいました。		
特記事項（事故、怪我等があれば必ず記入すること。その他、講師の意見要望、感想等も）	いつも少人数で教室をしているので、今回のように指導者側とのタイアップ事業はよかったと思います。いつもとは内容も違うし、イベント的な要素もあり、楽しさ倍増だったと思います。		

ハーブに親しもう！/雲南市加茂文化ホール　ラメール　　2/16

ハーブの会のみなさんと
リースで携帯ストラップづくりを
行いました。
みんな真剣に
取り組んでいます。

こんなステキな
ストラップができました。

教室プログラムの集計表（平成19年8月7日～20年2月29日）

各施設別参加人数・教室数と人気が高かった教室

	海洋センター	ラメール	古代鉄歌謡館	大東体育館	アスパル	チェリヴァホール	その他	合　計
参加人数	503	367	417	369	1048	1334	362	4400
教 室 数	90	72	44	17	69	48	7	347
人気教室	ミニバスケット	お料理	神楽	卓球	紙飛行機	映画上映	伝えたい美しい日本のことば	
	体操	パーカッション	絵画	親子エアロビ	3B体操キッズ	マジック教室	滝めぐり	
	3B体操キッズ	ジャズ	和太鼓	ニュースポーツ	ニュースポーツ	将棋	山王寺棚田と野外炊飯体験	

月別参加人数・教室数

	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
月別参加	680	312	352	304	442	715	1595	4400
教室回数	55	51	51	46	47	44	53	347

月別・施設別参加人数表

	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
海洋センター	168	49	45	63	58	39	81	503
ラメール	67	58	27	36	54	24	101	367
古代鉄歌謡館	38	19	29	42	43	106	140	417
大東体育館	6	34	146	28	52	53	50	369
アスパル	206	66	101	61	79	81	454	1048
チェリヴァホール	112	86	4	74	156	412	490	1334
その他	83						279	362
合計	680	312	352	304	442	715	1595	4400

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
（うんなん元気っ子わくわくﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ）アンケート調査表

【小学生向け】　　平成19年12月実施

このアンケートは、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」をもっと楽しいものにするために、小学生のみなさんのようすや気持ちを聞くものです。テストではありませんから、分からないときは、おとなの人に聞いてください。

☆小学校1・2年生のひとは、おうちの人といっしょにアンケートをしてください

1．男	ア　小学校1年生	エ　小学校4年生
	イ　小学校2年生	オ　小学校5年生
2．女	ウ　小学校3年生	カ　小学校6年生

問1　あなたは、週末(土曜日・日曜日）や休みの日にどこでよく遊んでいますか？

（ふくすうえらんでもいいです）

ア　自分の家の中
イ　友達の家
ウ　公園
エ　公民館
オ　市体育館･文化ホール
カ　図書館（としょかん）
キ　スーパーやコンビニ
ク　池、川、海、山
ケ　家族で出かける
コ　その他

問2　あなたは、週末や休みの日、何をして遊ぶことが多いですか？

〔例 ：友達と公園でおにごっこをして遊ぶ〕

問3－1　あなたは「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に参加したことがありますか？

ア　ある（問3－2～問3－4へ）

イ　ない（問3－5　裏面へ）

問3－2　（問3－1であると答えた人に質問します）
この「わくわくプログラム」にこれまで何回ぐらい参加しましたか？

ア　1回
イ　2回～5回
ウ　6回～10回
エ　週1回ぐらい
オ　週2回ぐらい
カ　週3回以上

問3－3　（問3－1であると答えた人に質問します）
参加した教室を選んだわけはなんですか？

ア　内容が楽しそうだから
イ　会場が家から近い
ウ　友達と一緒に参加できるから
エ　その他

【うしろにもアンケートがあります】

問３－４　（問３－１であると答えた人に質問します）

会場にはどのようにして行きましたか？

ア　歩いて
イ　自転車で
ウ　保護者の自動車で
エ　友達の親の自動車で
オ　市営バスで
カ　夏休みにキョロパスを使い市営バスで
キ　その他

問３－５　（問３－１でないと答えた人に質問します）

そのわけはなんですか？

〔例 ：会場が遠くて行けないから〕

問４　学校や公民館などでやっている放課後子ども教室に参加していますか？

ア　参加している

イ　参加していない

問５「うんなん元気っ子わくわくプログラム」についての、あなたの意見をきかせてください。

①これからの「わくわくプログラム」でどんなことをしたいですか？　（ふくすうえらんでもいいです）

ア　いろいろなスポーツをやってみたい
イ　いろいろな楽器をえんそうしてみたい
ウ　工作や実験をしてみたい
エ　雲南市のいろんなところに行って遊びたい
オ　アニメや映画をみたい
カ　料理やお菓子作りをしてみたい
キ　太鼓（たいこ）や神楽（かぐら）をしてみたい
オ　その他

やってみたいスポーツや楽器
工作などがあれば書いてください

②そのほか意見や考え、感想があれば自由に書いてください

ご協力ありがとうございました

保護者の皆様へ

このアンケートは、必ずお書きいただき、11月30日（金）までに児童生徒さんを通じて学校まで届けてください。今後、よりよい放課後教室の実施に向けてご協力をお願いします。なお、この調査の回答は統計的に処理し、全体としてまとめるものです。したがって、回答者にご迷惑をおかけすることはありませんので、必ず提出するようにご協力ください。

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
（うんなん元気っ子わくわくﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ）アンケート調査表

【保護者・教員用】
平成19年11月実施

問１　あなたは、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」を知っていますか？

ア　知っている（問2～8へ）

イ　知らない　（問い8へ）

問２　あなたは、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」を何で知りましたか？

ア　教育委員会等からの広報チラシ
イ　学校からの紹介
ウ　知人からの紹介
エ　有線放送やケーブルテレビの宣伝
オ　その他（　　）

問３　あなたは「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に参加したことはありますか‘

ア　ある

イ　ない

問４　あなたは、子どもたちの健全な育成を支援していく上で「うんなん元気っ子わくわくプログラム」はどのようなところが有効だとお考えですか？（該当するもの3つ以内で選んでください。）

ア　設備の整った本格的な施設で遊んだり、学んだりできるところ
イ　子どもたちがいろいろな年齢の友だちと遊んだり、学んだりできるところ
ウ　子どもたちが地域のいろいろな大人との関わりが持てるところ
エ　子どもたちが自由にいろいろな遊びや体験をすることができるところ
オ　地域の大人同士が関わりを持てるところ
カ　有効だとは思わない

理由

問５　あなたは、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」によって、地域にどのような効果が表れたと思いますか？（該当するものを3つ以内で選んでください。）

ア　学校とも協力しながら、地域で子どもを見守るという協力体制ができつつある。
イ　地域でのあいさつや会話が増えた。
ウ　地域の様々な活動に多くの人が参加・協力するようになった。
エ　保護者が地域活動に参加するようになった。
オ　地域で子どもたちの問題行動（いたずら、いじめ、非行など）が減ってきた。
カ　特に変わっていない。
キ　その他（具体的に）

【裏面に続きます】

問6　あなたは、地域に「うんなん元気っ子わくわくプログラム」が開設されることによって、子どもたちにどのような効果が表れたと思いますか？（該当するものを3つ以内で選んでください。）

ア　市内の体育･文化施設が気軽に利用できるようになった。
イ　屋外で遊ぶ子どもの姿が増えた。
ウ　自分たちで新しい遊びを考えだすようになった。
エ　大人に頼らず、自分たちで活動するようになった。
オ　誰とでも遊ぶようになった。
カ　異学年同士でよく遊ぶようになった。
キ　相手を思いやる気持ちを持てるようになった。
ク　礼儀正しくなった。よくあいさつするようになった。
ケ　ルールを守り、集団で協力して遊べるようになった。
コ　自分勝手な行動が少なくなった。
サ　自分からきちんと後片付けをするようになった。
シ　特に変わっていない。
ス　その他（具体的に）

問7　あなたは、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」をより活発にするためには、どのようなことが必要だと思いますか？（該当するものを3つ以内で選んでください。）

ア　地域の人たちの理解や協力
イ　子どもたちの保護者の理解や協力
ウ　学校の協力や理解
エ　行政（教育委員会）の支援
オ　指導スタッフやボランティアの協力・拡充
カ　施設や設備（遊具、道具など）の充実
キ　その他（具体的に）

問8　最後に「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に関してご意見ご要望がありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室
（うんなん元気っ子わくわくﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ）アンケート調査表

【学校・教員用】

平成19年11月実施

この調査は、「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室（うんなん元気っ子わくわくプログラム）」の評価・改善に役立てるためにおこなうものです。回答は統計的に処理され、全体としてまとめられます。したがって、回答者にご迷惑をおかけすることはありません。

問１　あなたは、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」を知っていますか？

ア　知っている（問2～問8へ）

イ　知らない　（問い9へ）

問２　あなたは、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」を何で知りましたか？

ア　教育委員会等からの広報チラシ
イ　学校からの紹介
ウ　知人からの紹介
エ　ケーブルテレビの宣伝
オ　その他（　　）

問３　あなたは「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に行ったことはありますか？

ア　ある

イ　ない

問４　あなたは、子どもたちの健全な育成を支援していく上で「うんなん元気っ子わくわくプログラム」はどのようなところが有効だとお考えですか？（該当するもの3つ以内で選んでください。）

ア　子どもたちがいろいろな年齢の友だちと遊んだり、学んだりできるところ
イ　子どもたちが地域のいろいろな大人との関わりが持てるところ
ウ　子どもたちが自由にいろいろな遊びや体験をすることができるところ
エ　地域の大人どうしが関わりを持てるところ
オ　有効だとは思わない

理由

カ　その他（具体的に）

キ　わからない

問５　あなたは、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」によって、地域がどのように変わったと思いますか？（該当するものを3つ以内で選んでください。）

ア　学校とも協力しながら、地域で子どもを見守るという協力体制ができつつある。
イ　地域でのあいさつや会話が増えた。
ウ　地域の様々な活動に多くの人が参加・協力するようになった。
エ　保護者が地域活動に参加するようになった。
オ　地域で子どもたちの問題行動（いたずら、いじめ、非行など）が減ってきた。
カ　特に変わっていない。
キ　その他（具体的に）

【裏面に続きます】

問7　あなたは、地域に「うんなん元気っ子わくわくプログラム」が開設されることによって、子どもたちがどのようにかわったと思いますか？（該当するものを3つ以内で選んでください。）

ア　外で遊ぶ子どもの姿が増えた。
イ　自分たちで新しい遊びを考え出すようになった。
ウ　大人に頼らず、自分たちで活動するようになった。
エ　誰とでも遊ぶようになった。
オ　異学年同士でよく遊ぶようになった。
カ　相手を思いやる気持ちを持てるようになった。
キ　礼儀正しくなった。よくあいさつするようになった。
ク　ルールを守り、集団で協力して遊べるようになった。
ケ　自分勝手な行動が少なくなった。
コ　自分からきちんと後片付けをするようになった。
サ　特に変わっていない。
シ　その他（具体的に）

問8　あなたは、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」をより活発にするためには、どのようなことが必要だと思いますか？（該当するものを3つ以内で選んでください。）

ア　地域の人たちの理解や協力
イ　子どもたちの保護者の理解や協力
ウ　学校の協力や理解
エ　行政（教育委員会）の支援
オ　指導スタッフやボランティアの協力・拡充
カ　施設や設備（遊具、道具など）の充実
キ　その他（具体的に）

問9　最後に「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に関してご意見ご要望がありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました

文化体育施設利用放課後子ども教室　小学校児童アンケート集計データ（１回目抜粋）

実施日　H.19.12
対象：市内全小中学校児童

Ⅰ．回収状況

回収数	1,009
回収率	78.4%

Ⅱ．週末や休みの日にどこでよく遊んでいますか？

1	自分の家の中	783
2	家族で出かける	553
3	友だちの家	447
4	図書館	92
5	池、川、海、山	47
6	スポ少、部活	46
7	習い事	11

Ⅲ．週末や休みの日に何をして遊ぶことが多いですか？

1	ゲーム	313
2	友だちと遊ぶ	191
3	野球･キャッチボール	113
4	兄弟、姉妹と遊ぶ	109
5	本、漫画を読む	65

Ⅳ．参加動機について

1	内容が楽しそうだから	92
2	友だちと一緒に参加できるから	43
3	会場が家から近い	19

Ⅴ．不参加の理由について

1	内容がわからない（知らなかった）	226
2	行事、用事等他の都合があるから	113
3	会場が遠い（一人で行けない）	93
4	スポ少、部活（応援含む）	56
5	親の仕事等の都合で行けない	57

Ⅵ．これからのわくわくプログラムでしてみたいこと

1	いろいろなスポーツをやってみたい	518
2	料理やお菓子つくりをしてみたい	427
3	工作や実験をしてみたい	423
4	アニメや映画をみたい	398
5	雲南市のいろいろなところへ行って遊びたい	286

文化体育施設利用放課後子ども教室　保護者アンケート集計データ（1回目抜粋）

実施日：H.19.12
対象：市内全小中学校全保護者

Ⅰ．回収状況

回収数	789
回収率	28.4%

Ⅱ．わくわくプログラムを知っていますか？

知っている	587
知らない	202

Ⅲ．何で知りましたか？

1	教育委員会等からの広報チラシ	317
2	学校からの紹介	286

Ⅳ．参加したことがありますか？

ある	194
ない	416

Ⅴ．子どもたちの健全な育成を支援していく上で
わくわくプログラムはどのようなところが有効だと思いますか？

1	子どもたちがいろいろな年齢の友だちと遊んだり、学んだりできるところ	393
2	子どもたちが自由にいろいろな遊びや体験をすることができるところ	368
3	子どもたちが地域のいろいろな大人との関わりが持てるところ	256
4	設備の整った本格的な施設で遊んだり、学んだりできるところ	254

Ⅵ．地域にどのような効果が現れてきたと思いますか？

1	学校とも協力しながら、地域で子どもを見守るという協力体制ができつつある	241
2	地域の様々な活動に多くの人が参加・協力するようになった	127
3	地域でのあいさつや会話が増えた	49
4	保護者が地域活動に参加するようになった	45

Ⅶ．わくわくプログラムが開設されることによって、子どもたちに
どのような効果が現れてきたと思いますか？

1	市内の体育・文化施設が気軽に利用できるようになった	215
2	異学年同士でよく遊ぶようになった	58
3	ルールを守り、集団で協力して遊べるようになった	46
4	屋外で遊ぶ子どもの姿が増えた	33
5	自分達で新しい遊びを考えだすようになった	30
6	相手を思いやる気持ちを持てるようになった	27

Ⅷ．わくわくプログラムをより活発にするためには
どのようなことが必要だと思いますか？

1	指導スタッフやボランティアの協力、拡充	294
2	子どもたちの保護者の理解、協力	267
3	地域の人達の理解、協力	262
4	行政（教育委員会）の支援	222

このアンケートは、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」をもっと楽しいものにするために、みなさんのようすや気持ちを聞くものです。テストではありませんから、分からないときは、おとなの人に聞いて**全員が書いて**ください。

☆　1・2・3年生は、おうちの人といっしょにアンケートをしてください。

２月２９日（金）までに担任の先生に出してください。

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室

うんなん元気っ子わくわくプログラム　アンケート

小学校　　年　　（男・女）

問１「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に参加したことがありますか？

ア　ある（問２～問７へ）

イ　ない（問８へ）

問２「うんなん元気っ子わくわくプログラム」にこれまで何回参加しましたか？

ア　１回～5 回

イ　６回以上

ウ　10 回以上

問３　なぜ「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に参加しようと思いましたか？

（２つ以上えらんでもいいです。）

ア　内容が楽しそうだったから

イ　会場が家から近いから

ウ　友達に誘われたから

エ　そのほか

問４　会場にはどのようにして行きましたか？

（２つ以上えらんでもいいです。）

ア　歩いて

イ　自転車で

ウ　家族の自動車で

エ　友達の家族の自動車で

オ　市営バスで

カ　夏休みにキョロパスを使い市営バスで

キ　そのほか

問５　**５年生、６年生**のみなさんにお聞きします。

あなたにとって、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」がどのような教室であってほしいですか？

（２つ以上えらんでもいいです。）

ア　学校ではできない、いろいろなことを体験できる教室

イ　自分の好きなことや得意なことを、上達させるための教室

ウ　ちがう学校の友だちや大人の人たちと一緒に活動できる教室

エ　休みの日に友達と参加できる教室

オ　そのほか

【うらがわもあります】

問６　６年生のみなさんにお聞きします。
中学生になっても、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に参加したいと思いますか？
ア　はい　　イ　いいえ

問７　これからの「うんなん元気っ子わくわくプログラム」でどんなことをしたいですか？
（２つ以上えらんでもいいです）
ア　いろいろなスポーツをやってみたい
イ　いろいろな楽器をえんそうしてみたい
ウ　工作や実験をしてみたい
エ　雲南市のいろんなところに行ってみたい
オ　アニメや映画をみたい
カ　料理やお菓子作りをしてみたい
キ　太鼓（たいこ）や神楽（かぐら）をしてみたい
ク　そのほか、やってみたいことや感想があれば自由に書いてください

問８　一度も参加したことがない児童は、その理由をお書きください。
〔例え：会場が遠くて行けないから〕

ありがとうございました。

（お問合せ先）
雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会
（雲南市加茂文化ホール内）
TEL:0854-49-8500 FAX:0854-49-6200　E-mail:houkago_lamer@yahoo.co.jp

保護者の皆様へ

このアンケートは、今後のよりよい放課後子ども教室の実施に向けて、お手数をかけますが、**必ずご記入いただき、児童用アンケートと一緒に２月２９日（金）までに**児童さんを通じて**学校へ届けてください**ますようにご協力をお願いします。

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室

うんなん元気っ子わくわくプログラム　アンケート　【保護者用】

学校名

問１「うんなん元気っ子わくわくプログラム」を知っていますか？

ア　知っている（問２～8へ）
イ　知らない　（問８へ）

問２「うんなん元気っ子わくわくプログラム」をどのようにして知りましたか？

ア　毎月配布されるプログラム
イ　学校からの案内
ウ　知人からの紹介
エ　有線放送（告知放送）
オ　ケーブルテレビの文字放送
カ　その他（　　）

問３　「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に保護者として参加したことはありますか？

ア　ある
イ　ない

問４　子どもたちの健全な育成を支援していく上で「うんなん元気っ子わくわくプログラム」はどのようなところが有効だと思いますか？（該当するものを３つ以内で選んでください。）

ア　設備の整った本格的な施設で遊んだり、学んだりできる
イ　子どもたちがいろいろな年齢の友だちと遊んだり、学んだりできる
ウ　子どもたちが地域の大人との関わりが持てる
エ　子どもたちが自由にいろいろな遊びや体験をすることができる
オ　地域の大人同士が関わりを持てる
カ　有効だとは思わない

理由

【裏面もあります】

問５「うんなん元気っ子わくわくプログラム」の開設により、子どもたちにどのような効果を期待しますか？（該当するものを３つ以内で選んでください。）

ア　市内の文化・体育施設が気軽に利用できる
イ　屋外で遊ぶ子どもが増える
ウ　自分たちで新しい遊びを考えだす
エ　大人に頼らず、自分たちで活動する
オ　誰とでも遊ぶ
カ　異学年同士で遊ぶ
キ　相手を思いやる気持ちを持つ
ク　礼儀正しくなり、よくあいさつする
ケ　ルールを守り、集団で協力して遊べる
コ　自分からきちんと後片付けをする
サ　特に期待しない
シ　その他（具体的に）

問６「うんなん元気っ子わくわくプログラム」で実施を希望する活動や教室などあればご記入ください。

問７　**掛合地区、吉田地区の保護者の方**へ質問です。
３月から、**掛合地区、吉田地区**での移動教室を実施します。今後、どのような教室を望みますか？
（現在実施している教室、またはその他ご希望のものがありましたらご記入ください）

問８「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に関して、意見や要望がありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。

（お問合せ先）
雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会
（雲南市加茂文化ホール内）
TEL:0854-49-8500　FAX:0854-49-6200　Email:houkago_lamer@yahoo.co.jp

教職員の皆様へ

このアンケートは、今後のよりよい放課後子ども教室の実施に向けて、皆様の意見を反映させるものです。またこのアンケートは、文部科学省が実施している放課後子どもプランモデル事業としての大切な調査で、今回も、児童及び保護者のアンケートと同時に教職員の皆様にもお願いするものです。お手数をかけますが、**必ずご記入いただき、２月２９日（金）まで**にご回答いただきますようにご協力をお願いします。

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室

うんなん元気っ子わくわくプログラム　アンケート【教職員用】

学校名

問１「うんなん元気っ子わくわくプログラム」を知っていますか？

ア　知っている（問２～６へ）
イ　知らない　（問６へ）

問２「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に参加したことはありますか？

ア　ある
イ　ない

問３　子どもたちの健全な育成を支援していく上で「うんなん元気っ子わくわくプログラム」はどのようなところが有効だと思いますか？（該当するものを３つ以内で選んでください。）

ア　設備の整った本格的な施設で遊んだり、学んだりできる
イ　子どもたちがいろいろな年齢の友だちと遊んだり、学んだりできる
ウ　子どもたちが地域の大人との関わりが持てる
エ　子どもたちが自由にいろいろな遊びや体験をすることができる
オ　地域の大人同士が関わりを持てる
カ　有効だとは思わない
理由

問４「うんなん元気っ子わくわくプログラム」の開設により、子どもたちにどのような効果を期待しまか？（該当するものを３つ以内で選んでください。）

ア　市内の文化・体育施設が気軽に利用できる
イ　屋外で遊ぶ子どもが増える
ウ　自分たちで新しい遊びを考えだす
エ　大人に頼らず、自分たちで活動する
オ　誰とでも遊ぶサ　特に期待しない
カ　異学年同士で遊ぶ
キ　相手を思いやる気持ちを持つ
ク　礼儀正しくなり、よくあいさつする
ケ　ルールを守り、集団で協力して遊べる
コ　自分からきちんと後片付けをする
シ　その他（具体的に）

【裏面に続きます】

問５　「うんなん元気っ子わくわくプログラム」で実施を希望する活動や教室などあればご記入ください。

問６　「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に関して、意見や要望がありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。

（お問合せ先）
雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会
（雲南市加茂文化ホール内）
TEL:0854-49-8500　FAX:0854-49-6200
Email:houkago_lamer@yahoo.co.jp

文化体育施設利用放課後子ども教室　小学校児童アンケート集計データ（2回目抜粋）

実施日　H.20.2.20
対象:市内全小学校児童

Ⅰ．回収状況

回収数	520
児童数	2,294
回収率	22.6%

Ⅱ．「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に参加したことがありますか？

ある	134
ない	386

Ⅲ．「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に何回参加しましたか？

1	1回～5回	102
2	6回以上	19
3	10回以上	17

Ⅳ．なぜ「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に参加しようと思いましたか？

1	内容が楽しそうだったから	103
2	友達に誘われたから	29
3	会場が家から近いから	18

Ⅴ．会場にどのようにして行きましたか？

1	家族の自動車で	117
2	歩いて	15
3	友達の家族の自動車で	15
4	自転車で	12

Ⅵ．「うんなん元気っ子わくわくプログラム」がどのような教室であってほしいですか？（5，6年のみ）

1	学校では体験できないことを体験できる	17
2	休みの日に友達と参加できる	11
3	好きなことや得意なことを上達させる	8

Ⅶ．中学生になっても、「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に参加したいと思いますか？（6年のみ）

はい	8
いいえ	1

Ⅷ．これからの「うんなん元気っ子わくわくプログラム」でどんなことをしたいですか？

1	いろいろなスポーツをやってみたい	66
2	アニメや映画をみたい	66
3	料理やお菓子作りをしてみたい	60
4	工作や実験をしてみたい	58

Ⅸ．一度も参加したことがない児童は、その理由をお書きください

1	他の用事で時間が合わない	107
2	会場が遠くて行けない	77
3	家族が仕事や家の用事で都合が合わない	62

文化体育施設利用放課後子ども教室　保護者アンケート集計データ(2回目抜粋)

実施日　H.20.2.20
対象:市内全小学校保護者

Ⅰ. 回収状況

回収数	464
回収率	27.9%

Ⅱ.「うんなん元気っ子わくわくプログラム」を知っていますか？

知っている	417
知らない	47

Ⅲ.「うんなん元気っ子わくわくプログラム」をどのようにして知りましたか？

1	毎月配布されるプログラム	245
2	学校からの案内	202
3	ケーブルテレビの文字放送	15
4	有線放送(告知放送)	13

Ⅳ.「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に保護者として参加したことはありますか？

ある	72
ない	345

Ⅴ. 子どもたちの健全な育成を支援していく上で「うんなん元気っ子わくわくプログラム」はどのようなところが有効だと思いますか？

1	異年齢の友達と遊び、学べる	286
2	自由にいろいろな遊びや体験ができる	271
3	設備の整った施設で遊び、学べる	183
4	地域の大人との関わりが持てる	152

Ⅵ.「うんなん元気っ子わくわくプログラム」の開設により、子どもたちにどのような効果を期待しますか？

1	ルールを守り、集団で協力して遊べる	238
2	誰とでも遊ぶ	159
3	市内の文化・体育施設が気軽に利用できる	151
4	屋外で遊ぶ子どもが増える	110

文化体育施設利用放課後子ども教室　教員アンケート集計データ(2回目抜粋)

実施日　H.20.2.20
対象:市内全小学校教職員

Ⅰ．回収状況

回収数	98
教員人数	296
回収率	33.1%

Ⅱ．「うんなん元気っ子わくわくプログラム」を知っていますか？

知っている	96
知らない	2

Ⅲ．「うんなん元気っ子わくわくプログラム」に参加したことはありますか？

ある	6
ない	91

Ⅳ．子どもたちの健全な育成を支援していく上で「うんなん元気っ子わくわくプログラム」はどのようなところが有効だと思いますか？

1	異年齢の友だちと遊び、学べる	71
2	自由にいろいろな遊びや体験ができる	57
3	設備の整った施設で遊び、学べる	54
3	地域の大人との関わりが持てる	54

Ⅴ．「うんなん元気っ子わくわくプログラム」の開設により子どもたちにどのような効果を期待しますか？

1	ルールを守り、集団で協力して遊べる	59
2	市内の文化・体育施設が気軽に利用できる	47
3	異学年同士で遊ぶ	32

「総合的な放課後子どもプラン」推進シンポジウム

テーマ

文化体育施設利用の放課後子ども教室から見えてきたこと

子どもを取巻く急速な環境変化の中で、特に家庭や地域の子育て機能と教育力の低下が問題視される一方、放課後の子どもたちが安全で安心して過ごせる活動場所の確保を図ることが課題とされてきました。すなわち、地域教育力の再生を求める声が高まってきました。

当雲南市においては、全国に先駆けてその調査研究の指定を受けて、目下「市内文化体育施設利用・放課後子ども教室」のモデル事業を展開しています。

こうした中で、取り組んできた事業の事例を検証しながら、今後の活動の展望を探ってみる目的で、シンポジウムを開催いたします。

お誘い合せの上、ぜひご参加ください。

会場 チェリヴァ・ホール

平成２０年２月１１日（月・祝）
午前9時～12時　（8:30開場）

基調講演　9:10～10:10

講師　安間敏雄 氏（文部科学省スポーツ・青少年局青少年課長）
演題　「スポーツ体育施設を活用した文化の振興」

事例発表　10:15～10:45

事例１
「土・日 休み中の放課後子ども教室の取り組みについて」
事例２
「平日放課後子ども教室との連携について」

パネルディスカッション 10:45～12:00

パネリスト
○文部科学省、島根県、雲南市の放課後子ども教室関係者（予定）

対象：　児童、生徒の保護者及び教職員　　放課後子ども教室関係者
子どもの居場所づくり関係者
※その他一般の方の参加をお待ちしております。

入場：　自由参加

主催：雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会
後援：島根県教育委員会、雲南市教育委員会、株式会社 遊学

【お問い合わせ】
雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会
加茂文化ホールラメール　　加茂町宇治303　TEL　0854-49-8500
経済文化会館チェリヴァホール　　木次町里方55　TEL　0854-42-1155

総合的な放課後子どもプラン推進シンポジウム開催要項

テーマ「文化体育施設利用の放課後子ども教室活動から見えてきたこと」

１．概要・目的

子どもを取巻く急速な環境変化の中で、特に家庭や地域の子育て機能と教育力の低下が問題視される一方、放課後の子どもたちが安全で安心して過ごせる活動場所の確保を図ることが課題とされてきた。すなわち、地域教育力の再生を求める声が高まってきた。

これを踏まえて、本年度から文部科学省と厚生労働省が連携の下、地方公共団体が事業主体となって、総合的な放課後対策として「放課後子どもプラン推進事業」をスタートさせ、全国一斉に展開することとなった。

一方、文部科学省はその「放課後子どもプラン」の充実を図るために必要な調査研究を行い、その成果を普及することにより、子どもたちが地域社会の中で心豊かに健やかに育まれる環境づくりを推進しようとされている。

当雲南市においては、全国に先駆けてその調査研究の指定を受けて、目下「市内文化体育施設利用・放課後子ども教室」のモデル事業を展開しています。

こうした中で、取り組んできた事業の事例を検証しながら、今後の活動の展望を探ってみる目的で、シンポジウムを開催するものです。

２．内容

（１）基調講演　講師　文部科学省スポーツ・青少年局青少年課長　安間 敏雄　氏

演題　「スポーツ体育施設を活用した文化の振興」

（２）事例発表　事例１「土･日 休日の放課後子ども教室の取り組みについて」

実行委員会委員　高橋　勲 氏

事例２「平日放課後子ども教室との連携について」

地域教育コーディネーター　原田　尚 氏

（３）パネルディスカッション

標題　「期待される放課後子ども教室のあり方」

パネリスト

・文部科学省生涯学習課放課後子どもプラン連携推進室
・島根県放課後子ども教育推進委員代表
・島根県教育委員会生涯学習課
・雲南市教育委員会
・雲南市放課後子ども教室代表
・PTA 代表

３．開催期日・会場

・日時　：　平成 20 年 2 月 11 日（月・祝）午前 9 時～

午前 8：30～開場　午前 9：00～開会

・会場　：　木次経済文化会館チェリヴァホール　大会議室

４．対象

・児童・生徒の保護者及び教職員

・放課後子ども教室関係者

・子どもの居場所づくり関係者

※　その他大勢の一般参加者の方の参加をお待ちしております。

５．入場

無料

６．主催等

主催　雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室

後援　島根県教育委員会　　雲南市教育委員会　　株式会社遊学

７．お問い合わせ

雲南市加茂町宇治 303

雲南市加茂文化ホールラメール

TEL　0854-49-8500　　FAX　0854-49-6200

雲南市木次町里方 55

雲南市経済文化会館チェリヴァホール

TEL　0854-42-1155　　FAX　0854-42-1251

『総合的な放課後子どもプラン』推進シンポジウム

ねらい

子どもを取巻く急速な環境変化の中で、特に家庭や地域の子育て機能と教育力の低下が問題視される一方、放課後の子どもたちが安全で安心して過ごせる活動場所の確保を図ることが課題とされてきた。すなわち、地域教育力の再生を求める声が高まってきた。

これを踏まえて、本年度から文部科学省と厚生労働省が連携の下、地方公共団体が事業主体となって、総合的な放課後対策として「放課後子どもプラン推進事業」をスタートさせ、全国一斉に展開することとなった。

一方、文部科学省はその「放課後子どもプラン」の充実を図るために必要な調査研究を行い、その成果を普及することにより、子どもたちが地域社会の中で心豊かに健やかに育まれる環境づくりを推進しようとされている。

当雲南市においては、全国に先駆けてその調査研究の指定を受けて、目下「市内文化体育施設利用・放課後子ども教室」のモデル事業を展開しています。

こうした中で、取り組んできた事業の事例を検証しながら、今後の活動の展望を探ってみる目的で、シンポジウムを開催するものです。

テーマ

文化体育施設利用の放課後子ども教室から見えてきたこと

日程

基調講演　9：10～10：10

演題　「スポーツ体育施設を活用した文化の振興」

講師　安間　敏雄　氏（文部科学省スポーツ・青少年局青少年課長）

事例発表　10：15～10：45

事例1　「土・日 休日の放課後子ども教室の取り組みについて」

発表者　高橋　勲　氏　（放課後子ども教室実行委員会委員）

事例2　「平日放課後子ども教室との連携について」

発表者　原田　尚　氏　（地域教育コーディネーター）

パネルディスカッション　10：45～12：00

表題　「期待される放課後子ども教室のあり方」

パネリスト　島根県、雲南市の放課後子ども教室の関係者

アドバイザー　安間　敏雄　氏（文部科学省スポーツ・青少年局青少年課長）

コーディネーター　土江　博昭　氏（雲南市教育委員会教育長）

日時：平成２０年２月１１日（月・祝）

場所：木次経済文化会館チェリヴァホール

主催：雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会

後援：島根県教育委員会、雲南市教育委員会、株式会社 遊学

「スポーツ施設を活用した文化の振興」について

平成２０年２月１１日

「総合的な放課後子どもプラン」推進シンポジウム

学校週5日制の導入

趣旨：

学校、家庭、地域社会が一体となって、それぞれの教育機能を発揮する中で、子どもたちが自然体験や社会体験などを行う場や機会を増やし、自ら学び自ら考える力、豊かな心やたくましさなどの生きる力を育てようとするもの。

家庭や地域社会では学校とともに、豊富な生活体験や自然体験などを経験させ、子どもたちに豊かな心やたくましさなど「生きる力」をはぐくむことが必要。

‖

「新こどもプラン」の策定（平成14年～）

「地域こども教室推進事業」の実施（平成16年～18年）

「放課後子どもプラン(教室)」の実施（平成19年～）

地域子ども教室推進事業

●実施状況

年度	実施金額	実施箇所数
H16	6,552,155千円	5,321ヵ所(30)
H17	9,138,189千円	7,954ヵ所(87)
H18	6,537,240千円	8,318ヵ所(108)

（　）内は島根県での実施箇所数

●主な実施場所（H18年度）

	小学校	中学校	公民館	児童館	その他
計8,318	4,345	314	1,892	161	1,606

放課後子どもプラン

- 実施（補助金）の流れ

国（文部科学省・厚生労働省）1／3負担

↓ 補助

都道府県（基本的に教育委員会）1／3負担

↓ 間接補助

市町村（基本的に教育委員会）1／3負担

↓ 事業実施

放課後子どもプランの実施

地域子ども教室と放課後子ども教室

	地域子ども教室 （平成18年度実績）	放課後子ども教室 （平成19年度実績）
総事業費	6，394百万円	7，614百万円 （国庫補助　2,538百万円）
実施箇所数	8，318ヵ所	6，267ヵ所
うち小学校	4，345ヵ所 （52，2%）	4，298ヵ所 （68．6%）
実施市町村	―	865市町村
地方単独実施	―	195市町村 1，101ヵ所

現時点の実態・課題

- 実施箇所数の伸び悩み

＜背景＞

・「地域子ども教室」事業は国が10／10支援

・団体の主体的な事業展開

・「放課後子ども教室」は国の補助が全体の1／3？

・市町村を通じた申請・事業展開

||

地域における支援体制の不備・未成熟

5日制本格実施後の状況

- 子どもの**体力**低下傾向の継続（S60～）

  （←成人のスポーツ実施率（週1回）は上昇傾向にある）
- 自然の中で**活動**する青少年の減少

  （→日の出や日没を見たことがない、木登りの経験がない…）
- 青少年団体**会員数等**の減少傾向
- 5日制導入による授業時数の減を理由とした、必修科目の**未履修問題**発生

5日制の危機・学校中心社会の再来？

現状改善のために必要なこと

- 学校・地域・家庭の連携した環境の構築

  ← （前提として）学社連携・融合／官民連携

- 地域資源の活用

  ← 地域の見直し ＝ 地域への誇りの醸成

伝統的な文化の継承・新たな文化の創造

地域文化の振興について

- 文化芸術の振興に関する基本的な方針(H19.2.9)

第１　文化芸術の振興の基本的方向

２．ⅱ）文化力で地域から日本を元気にする

…この地域文化の厚みが日本文化の基盤を成している。
すなわち、地域文化が豊かになるほど日本文化全体も豊かになり、日本の魅力が高まる。

３．ⅳ）地域文化の振興

…地域文化の振興に当たっては、住民、文化芸術団体、社会教育関係者、学校、地方公共団体、地域の報道機関やメセナ活動に熱心な企業など地域文化の担い手が相互に連携・協力する取組を促すことが必要である。

第２　文化芸術の振興に関する基本的施策

９．（３）青少年の文化芸術活動の充実

・　青少年が多種多様な文化芸術に直に触れ、体験できる**機会の充実**を図るとともに、**学校や文化施設等を拠点**として、子どもたちが伝統文化や生活文化を継続的に体験・修得できる機会の充実を図る。　等

１０．（３）地域における文化芸術活動の場の充実

・　学校や文化施設以外の**様々な施設**においても、地域の芸術家、文化芸術団体、住民等の文化芸術活動への幅広い利用を促進する。

多能な場の活用に向けて

- 多様な場を活用した生活体験推進事業

【29,450千円（10ヵ所）】

①関係省庁の連携による地域ネットワーク型の体験活動

→　他省庁（庁内他部局）の所管する資源（港・河川・林・農場・商店街…）を新たな体験の場に活用

②廃校等を活用した生活体験の事業

→　廃校や文化施設・スポーツ施設などを新たな体験の場として活用し、独自の事業を展開

等、体験活動の機会や場を開拓する取組を推進。

雲南市に期待しています

- 教育長のリーダーシップの下、（学社連携に向けた）先進的な取組と実績

→ 教育支援コーディネーター・地域教育コーディネーターの任命・派遣　＝　*中教審（生涯学習分科会）議論に先行*

→ 長年にわたる研修生の派遣

→ 新たな「放課後子どもプラン」の実施

地域の一体化

全国の模範としての更なる実践を！

総合的な放課後子どもプラン推進シンポジウム
テーマ「文化体育施設利用の放課後子ども教室から見えてきたこと」

事例発表1
「土・日 休日の放課後子ども教室の取り組みについて」

発表者
雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会委員
高橋　勲

雲南市の「放課後こども教室」取り組み

平成16年度から「雲南市放課後子どもの居場所づくり」を国の支援の下取り組み、全国に先駆け全市内の児童・生徒を対象に「雲南市子どもの居場所づくり」を発足、月～土曜日学校施設等を利用し活動してきた。

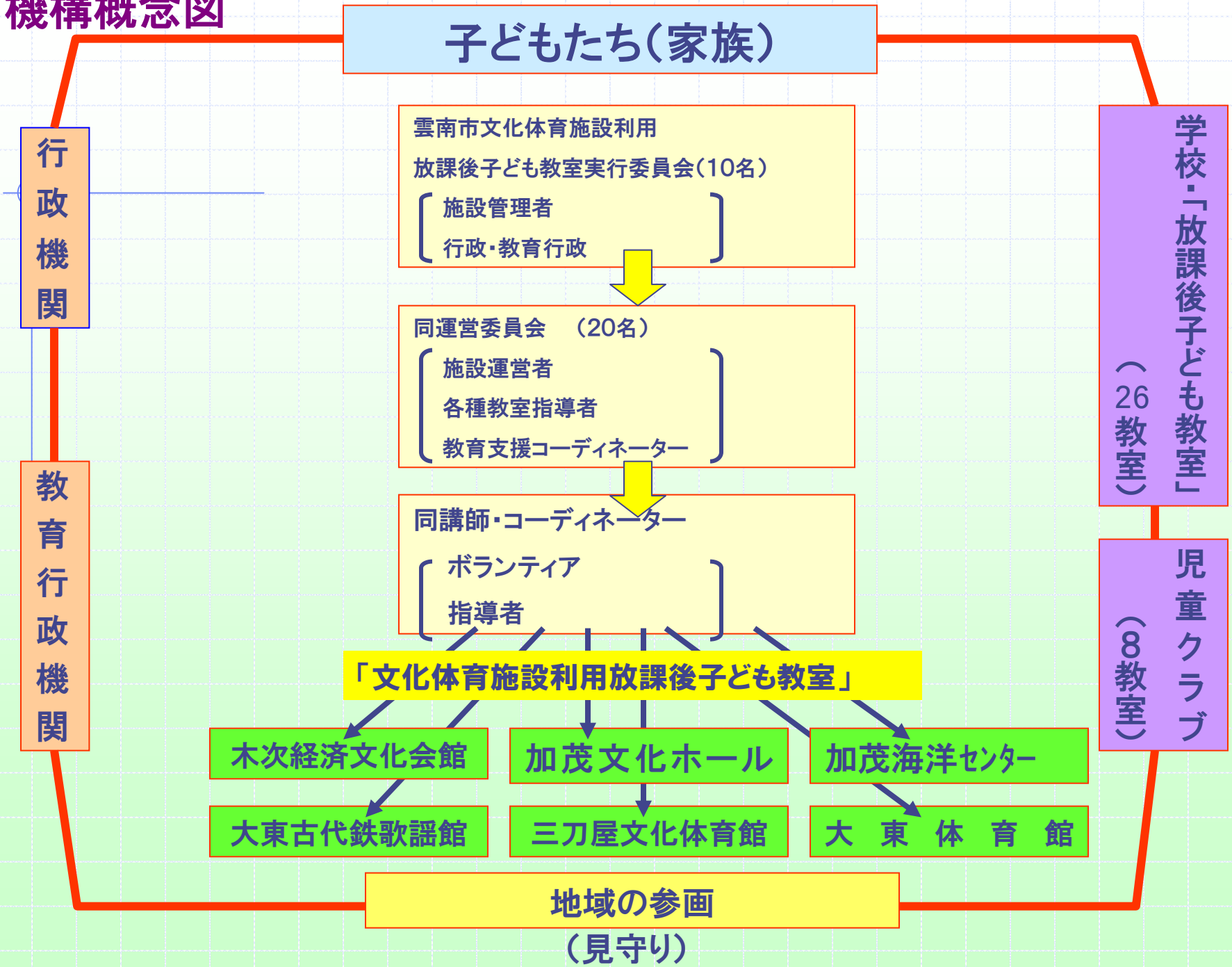
現在は平成19年度から創設された「放課後子どもプラン」に移行させ、毎週月～金曜日に事業を継続させているが、更に学校以外の社会教育施設を開放し、活動の機会を拡大させ、地域の教育力として提供する活動が求められている。

特に土・日・休日と長期の夏冬休み中の居場所の機会の提供が求められている。

雲南市文化体育施設利用
土・日・休日「放課後子ども教室」とは？

市内6ヶ所に存在する文化・体育施設を利用し、行政機関と教育機関との連携のもと学校での「放課後子ども教室」にない特色ある活動メニューを提供する。特に土曜日日曜日、休日と長期の夏冬休み中を活動の機会とし、子どもたちに魅力ある居場所づくりを提供できる。

機構概念図


子どもたち（家族）
行政機関
教育行政機関
学校・「放課後子ども教室」（26教室）
児童クラブ（8教室）
雲南市文化体育施設利用
放課後子ども教室実行委員会（10名）
施設管理者
行政・教育行政
同運営委員会　（20名）
施設運営者
各種教室指導者
教育支援コーディネーター
同講師・コーディネーター
ボランティア
指導者
「文化体育施設利用放課後子ども教室」
木次経済文化会館
加茂文化ホール
加茂海洋センター
大東古代鉄歌謡館
三刀屋文化体育館
大　東　体　育　館
地域の参画
（見守り）

事業の目的

雲南市内の文化・体育施設を開放、利用し「放課後子ども教室」を展開し、子どもたちが安全・安心に遊び学べる身近な放課後子ども教室を目指す。

文化体育施設利用の放課後子ども教室は4つのテーマを掲げ、子どもたちを見守り、地域で育てるプログラムを提供する。

【4つのテーマ】

〇感性を育てる「感（性）育」

〇歩くことを基本に体を動かす「歩（行）育」

〇健やかな心と体を育てる「健（康）育」

〇人として身に付ける心構えを育てる「徳育」

定期的に開催している教室

マジック教室

校長先生の特技
に子どもは夢中

3B体操キッズ

親子で参加でき
楽しくリズム体操

将棋道場

掛合出身で山陰
名人有段者指導

子ども神楽教室

伝統芸能を体験
し地域を知る

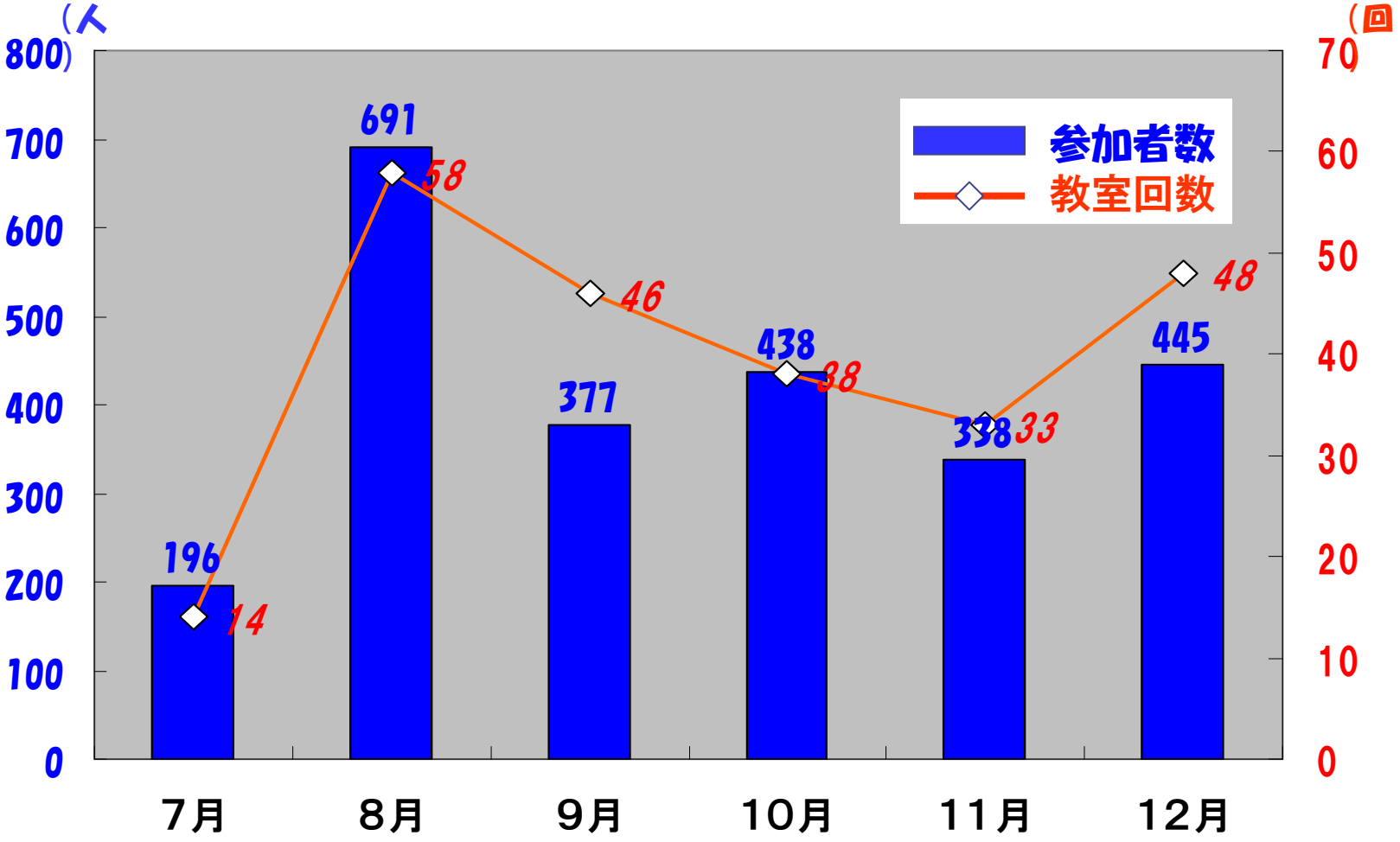
施設の特徴をいかしたプログラムづくり

特別鑑賞教室

伊調姉妹のレスリング教室
2月3日(日)三刀屋アスパル

一流のアスリートやアーティストから直接指導を受けたり鑑賞することで、子どもたちに感動を与えその競技や文化活動を始めるきっかけをつくる。その中でルールやマナー、精神を学ぶ

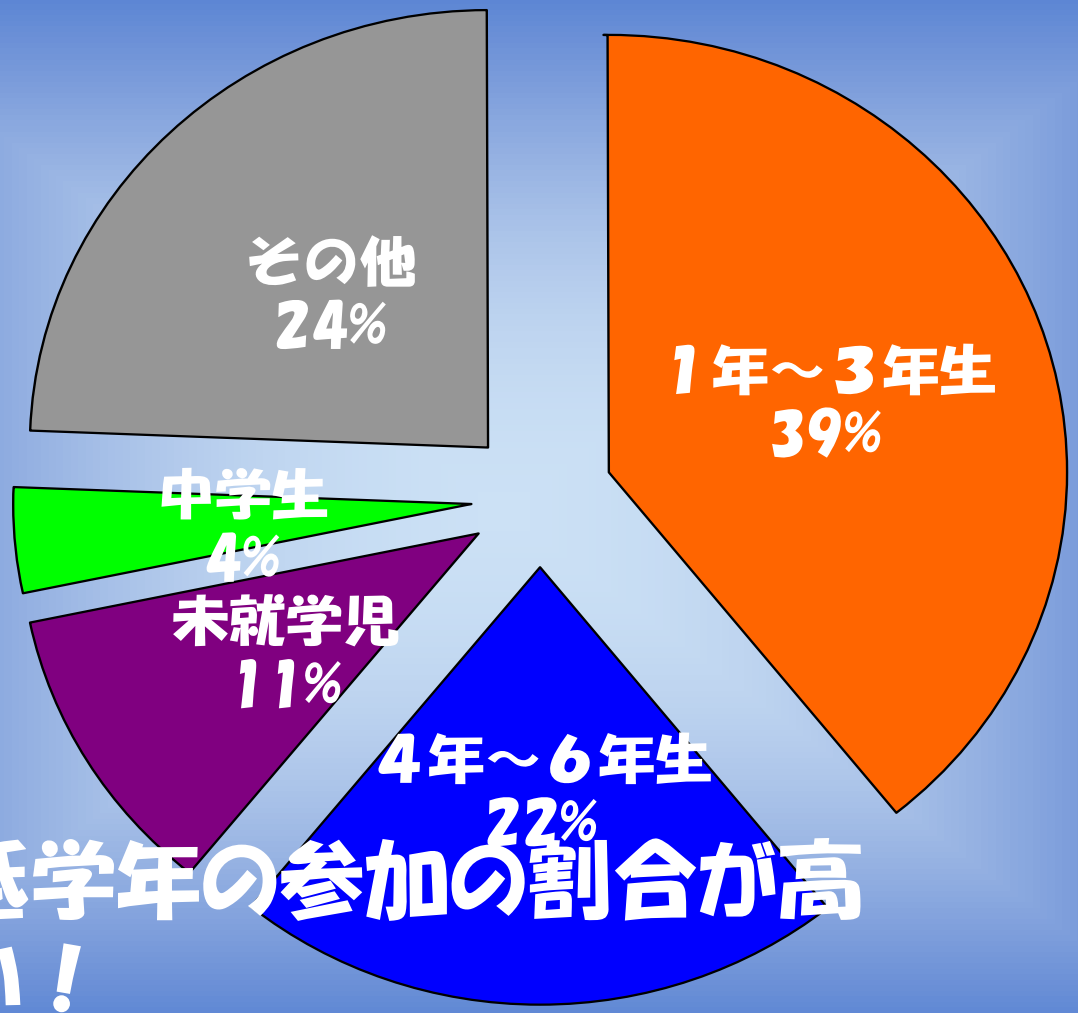
月別の教室回数と参加者数



教室数と参加者数は比例している

特に夏休みは子どもたちの気分も開放的になり参加者増

教室参加者の年代別割合



低学年の参加の割合が高い！

高学年はスポ少や塾で忙しい！

まとめ 「今後の大きな課題」

1. 学校利用の放課後子ども教室との役割分担と連携をどう進めるか
（「ふるさと雲南キラキラ 未来プロジェクト」の推進）
2. さらなる地域の教育力再生にどうつなげていくのか
（社会教育の推進・少子高齢化対策など地域教育力の構築）
3. 放課後子ども教室が地域における総合的な学習に果たす役割
（「生きる力」を育む教室の導入）
4. 雲南のブランド化プロジェクト〔5つのふるさとの幸・恵み〕を
プログラムにどういかしていくのか （体験活動）
5. 小学校高学年と中学生の参加希望への対処
（スポ少・部活動との連携）
6. 全市内の立地条件への対応
（教室参加への交通手段の確保）
7. 来年度以降の継続的な教室開設への行政からの支援策

まとめ 「その他の課題」

1. 参加する子どもの定着化と新しい参加者の確保対策
2. 6施設以外での子ども教室の新しい展開
   （吉田・掛合の子どもたちを対象にした教室）
3. 子どもたちの魅力と意欲を引きつける教室の企画づくり
4. プログラムの周知徹底と普及対策
   （学校と雲南市文化体育施設利用放課後
   子ども教室実行委員会との情報の共有化）

雲南市における放課後子ども教室の現状と課題

平成20年2月11日（月）
島根県雲南市教育委員会
生涯学習課　原田　尚

「子どもの居場所づくり」は、地域・家庭の意識改革の大きな目玉

- 教育改革の大きな二つの目玉

教育改革の大きな目玉

総合的な学習の時間

〇学校が地域に目を向ける

・教師の意識改革

・開かれた学校づくり

↓

学校の教育力の向上

地域・家庭の教育改革の大きな目玉

放課後子ども教室

〇地域・家庭が学校に目を向ける

・保護者、地域住民の意識改革

・開かれた地域づくり

↓

地域・家庭の教育力の向上

雲南市としての方向性（放課後子ども教室について）

校長(学校)に・・・・校長のビジョンと支援内容の具体化

パートナーシップ

リーダーシップ

パートナーシップ

リーダーシップ

教育委員会

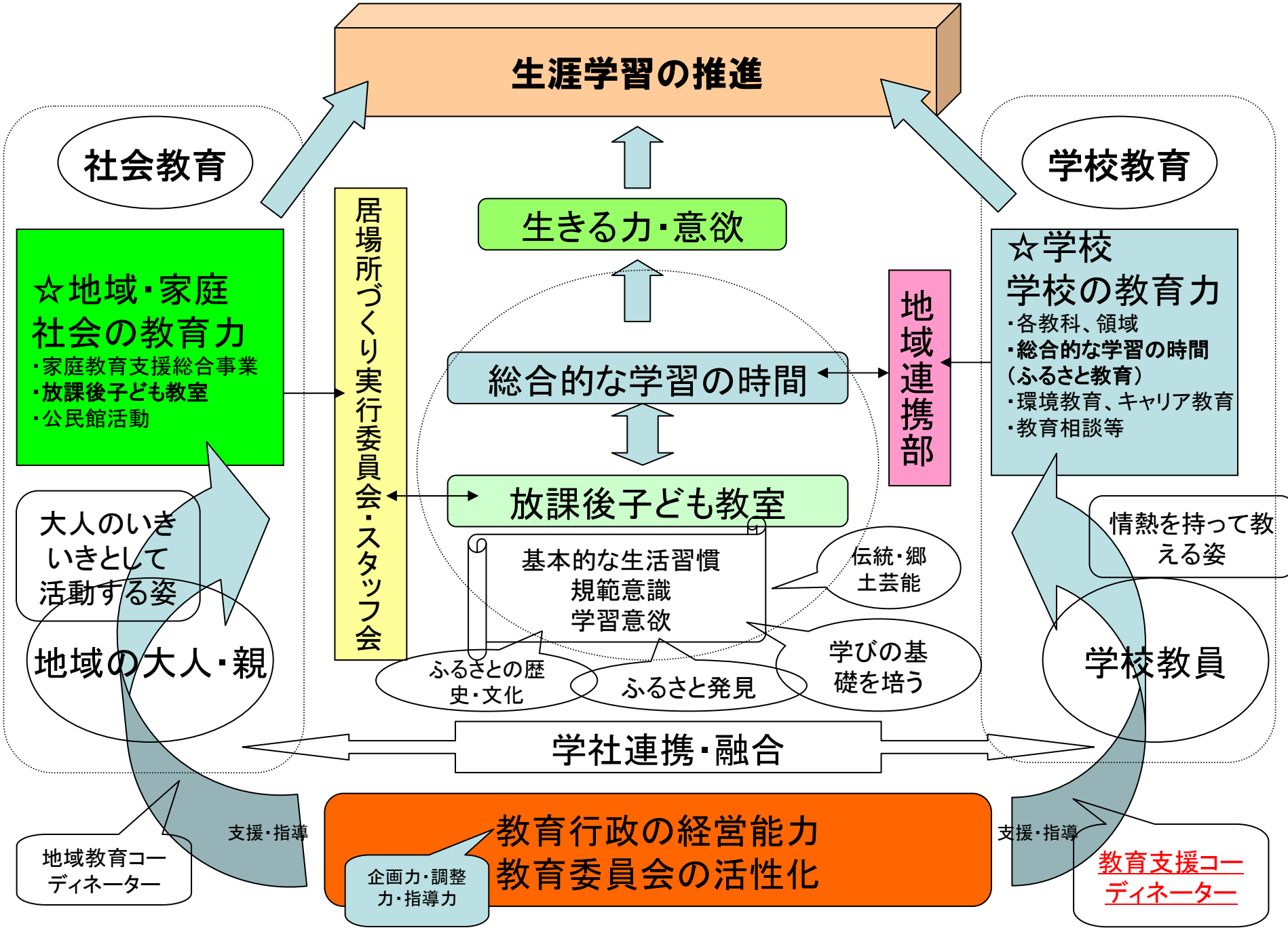
リーダーシップ

家庭に・・・・お任せではない。(学童保育ではない。)
スタッフの一員として参加
週末の事業(積極的な参加)

地域に・・・・子どもと顔見知りになること
(日常的な声がけと適時、適切な指導)
「良いことはほめ、悪いことは叱る」
→素直に受け入れる「子どもと親」

パートナーシップ

『地域における総合的な学習の時間』としての位置づけ


生涯学習の推進
社会教育
学校教育
☆地域・家庭
社会の教育力
・家庭教育支援総合事業
・放課後子ども教室
・公民館活動
居場所づくり実行委員会・スタッフ会
生きる力・意欲
総合的な学習の時間
放課後子ども教室
地域連携部
☆学校
学校の教育力
・各教科、領域
・総合的な学習の時間
（ふるさと教育）
・環境教育、キャリア教育
・教育相談等
大人のいきいきとして活動する姿
地域の大人・親
基本的な生活習慣
規範意識
学習意欲
伝統・郷土芸能
ふるさとの歴史・文化
ふるさと発見
学びの基礎を培う
情熱を持って教える姿
学校教員
学社連携・融合
地域教育コーディネーター
支援・指導
教育行政の経営能力
教育委員会の活性化
企画力・調整力・指導力
支援・指導
教育支援コーディネーター

子どもの居場所づくり事業

平成17年・18年度の2ヵ年事業
　18年度は小・中学校区等に36箇所の居場所開設
　雲南市の特色
　☆小・中学校区に開設
　　（学校に地域に目を向けてもらう）
　　（地域も学校の現状を知ってもらう）
　☆教育支援センターとしての開設（不登校児童・生徒に対応した居場所づくり

平成17年度度児童居場所への参加数（延べ参加数）
　島根県・・・・235，660人（約100箇所）
　雲南市・・・・99，645人（約40箇所）
指導員数（延べ人数）
　雲南市・・・17，349人

平成18年度子どもの居場所への参加数（延べ参加数）

雲南市・・・約12万人

指導員数（延べ参加数）

雲南市・・・約4万人

平成19年度より放課後子どもプランへ

スタッフ会・研修会の開催

- **スタッフ会**

  1スタッフの悩みや課題の解決の場
  2スタッフ同士による情報交換の場
  3活動計画を決めたり、
  スタッフの日程を調整したりする場
  4教育委員会との情報交換の場

スタッフ会の様子

- **研修会**

  1島根県の全体研修会
  2教育事務所別研修会
  3雲南市主催研修会
  （危機管理研修会
  生涯学習フォーラム）

平成17年度
危機管理研修会の様子

今後の課題

- <u>スタッフの確保</u>
- <u>保護者との連携（保護者会の組織化等）</u>
- <u>さまざまな子どもへのかかわり</u>
- 放課後児童クラブとの連携・共存
- スタッフに対する研修の充実

（大人のかかわり方の共通理解）

「総合的な放課後子どもプラン」推進シンポジウム
パネルディスカッション発言録

標題　「期待される放課後子ども教室のあり方」
パネリスト
　後藤　康太郎　氏（島根県教育庁生涯学習課社会教育振興グループ）
　小林　和彦　氏　（ＰＴＡ代表）
　加藤　雄二　氏　（教育支援コーディネーター）
　坂本　暢子　氏　（雲南市放課後子ども教室代表）
アドバイザー
　安間　敏雄　氏　（文部科学省スポーツ・青少年局青少年課長）
コーディネーター
　土江　博昭　氏　（雲南市教育委員会教育長）

（司会者）
　これから「期待される放課後子ども教室のあり方」と題しましてパネルディスカッションを行います。
　パネリストの皆さんは、日頃から教育関係者としてご活躍いただいておりますが、また後ほど個々にご紹介いただきたいと思います。先ほどご講演していただきました安間課長様にはアドバイザーとしてご助言をお願いいたします。
　それではここからはコーディネーター役の雲南市教育長土江博昭教育長へマイクをお譲りいたしますのでよろしくお願いいたします。
○コーディネーター（土江博昭教育長）
　それではこれからパネルディスカッションを始めたいと思います。教育長の土江でございます。どうぞよろしくお願いいたします。
　まず、先ほども発表がございましたが、放課後子ども教室は、平成１７年から雲南市では全小学校、そして公民館、中学校で行いましたが先ほど原田コーディネーターからお話がありましたように、平成１８年度は１２万人の子どもたち、そして４万人の地域の方々のご協力により本当にこの事業を進められるのも皆様のご理解ご協力あってのことと思っております。地域の皆様、学校の関係者の皆様、この場をお借りしまして厚くお礼を申し上げたいと思います。
　それから今年度から開始となり、先ほど高橋勲実行委員会委員さんから発表ありましたこの文化体育施設での子ども教室、これもまた特色ある６箇所での事業に子どもたちが多く参加しておりますし、また職員の皆様のお力、あるいは指導者の皆様のお力で子どもたちが地域で守られ、育てられているということにつきまして、今日の主催者であります文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会の皆様にも厚くお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。
　それでは早速パネルディスカッションに入りたいと思いますが、まずそれぞれパネリストの皆さんに自己紹介を兼ねて、それぞれの立場でこの放課後子ども教室についての所感等を含めて、それぞれのご紹介合わせてご発表お願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。
○パネラー（後藤康太郎氏）
　みなさん、おはようございます。島根県教育委員会生涯学習課の後藤と申します。この放課後子どもプラン、放課後子ども教室の担当をしておりますけれど、さかのぼりまして、地域子ども教室の時代、

あるいは子どもの居場所づくり事業といっておりました時代からずっと担当させていただいております。自己紹介も兼ねてということでしたので、私、今日ここに来るまでのところで、３連休の最初の１日目、２日目ですけれど、私は生まれも育ちも松江っ子でございますが、松江っ子といっても都会ではなくて東出雲町の境みたいなところに住んでいるのですけど、うちの集落の子どもたちを集めて公民館で夜、鍋を囲んで遊んだり、子どもたちはそのまま公民館に泊まって、次の日は、田んぼでゴルフをしたりして遊んできました。こういう取り組みをやっていますとよくよくそのことを分かっていたつもりですけど、最初子どもたちは全員ばらばらで一緒に遊ぶようなこともなかったのですけど、鍋を囲むようなことになって、上は６年生から下は年少組の子どもまで２０人近くが仲良く遊んでいました。やはり、そういう機会を意図的につくっていかないと子どもたちの育ちを支えることというのはなかなかできないということを改めて確認して、また今日ここにお邪魔させていただいております。県内の様子など、皆様方にご提供していきたいと思います。今日はよろしくお願いします。

○パネラー（小林和彦氏）

大東小学校の小林です。私はPTAと書いてありますが、「T」の方ということで今日はお話をさせていただきたいと思っているのですが、「T」だけでは話す内容があまりなくて、実は１７年に雲南市の小学校・中学校で当時の子どもの居場所づくりを立ち上げたときに、当時勤務しておりました公民館や地域の方々といろいろ相談しながら立ち上げてきた学校の立場として、地域の方にいろいろお願いや協力したりということで、本当に支え合ってきたということを実感し、立ち上げたという経緯を持っていますし、今も子どもの居場所づくりをやっています。大東小でも２７０人の子どものうち、今、８０人を越える子どもが登録しています。若干、大きな悩みも持っていますが、学校が中心となってほとんどやっておりまして、そこではまた学校と居場所の関わりについていろいろ私も感じることがあります。それから今年から始まりました文化体育施設を活用した土曜、日曜の放課後子どもプランについて先ほどちょっと後姿ほど出ていましたけれど、私も放課後子ども教室のマジック教室のスタッフとしてかかわっていまして、いろいろな面からPTAの「T」として出てはおりますけれど、そういう面からお話をさせていただければなと思います。今日は実行委員会さんの方で企画してこのシンポジウムを開いておりますけれど、今年スタートした放課後子どもプランの中の文化体育施設を活用した土曜・日曜・休日、特に先ほど文科省の課長さんのお話にもありました土曜、日曜の学校の週５日制についてのまた大きな見直しの過渡期にきていると、課題が明確になってきてそれについて本当に立直しを図っていかなければならないという状況にあるとお話にありましたが、当時いかに土日の受け皿を地域や学校がどうするかという大きな課題がありました。そういうのをまた新たに、ここで考えていく、あの当時に戻るのではなく、新たな課題として学校や地域が支えていく、そういうことを私たちが方向性を出していくことが必要ではないかなと感じておりますのでどうぞよろしくお願いします。

○パネラー（坂本暢子氏）

私は、子どもの居場所づくりの代表ということでここに出させていただいておりますが、よその居場所の様子をあまり知りませんので、私が所属している居場所のことについて今日はいろいろお話させていただきます。私は、日登の居場所に参加していますが、自由遊びを中心として日々やっております。あまりきちんとした予定を立てるのではなく、計画のないままにやっております。それが参加してくださるスタッフにとっては、気軽に出て子どもたちと一緒に遊んだり、相手ができる要因だと思います。普通はそういう自由遊びが主体の活動ですが、季節に応じてイベント的にしめ縄作りや餅つき、豆腐作り、川遊びなど、昔私たちが幼いときは当たり前だったことが今では体験できないような行事を組み入れながら進めているという状態です。私たちスタッフとしてはいろいろな遊びを取り入れていきたいと

思いますが、その技術がありません。以前行政への要望として遊び方、ボールを使って遊ぶ、言葉遊びなどの手段を教えてほしいということを提案しました。先日、出雲の合庁で集まり講習会があり、私の居場所から２名が参加しました。けれども、そういう大きなエリアで講習していただいても、本当に代表者が１，２名学んで帰るということなので、できましたらもっと小さなエリアでたくさんの人が参加できる研修会を開いていただきたいなと思います。そうすればもっと私たちも子どもたちと楽しく遊ぶことができると感じました。

○パネラー（加藤雄二氏）

教育支援コーディネーターの加藤雄二と申します。よろしくお願いします。といいましても私、市の教育行政の代表の席に座らせていただいていますが、教育行政代表というのは大変おこがましくて、私は居場所づくり事業の市の担当者でもありません、というよりも私は週５日制が始まるときに旧加茂町で行われていたチャレンジスクールという事業がありまして、その土曜日対策の事業のスタッフとして参加させていただいております。それ以来ずっと参加しており、そのとき小学校１，２年生の子どもがもうすでに中学生になっていますので、もう６年とか７年とかになるのかなと思います。ずっと土曜日事業の講師というかスタッフとして参加させてもらっていますのでそういう観点から、また平成１８年から教育支援コーディネーターという立場で、大東中学校に駐在させていただいております。今まで教育委員会の事務を２年間ほど行った後、学校に入りまして、教育について改めて考えさせていただくことが非常に多くて、私自身にとってすごくためになる２年間であったなと思います。その中でいろいろこれが必要であろうとか、是非こういう風になってほしいといういろいろな思いがたくさん出てまいりましたので、そういった部分について今回お話できたらいいなと、皆様と考えていけたらいいなと思います。本日はどうぞよろしくお願いします。

○コーディネーター（土江博昭教育長）

ありがとうございました。それでは、高橋勲実行委員会委員さんからは１１の課題が、そして原田尚地域教育コーディネーターの方からは５つの課題がございました。これをすべてこれから議論するのはなかなか難しいですけれども、今日のパネルディスカッションでは、今まで成果はたくさんあったけれども課題が多い、そういう課題を皆様と一緒に解決しながら、今後より良い子ども教室を進めていくにはどうしたらよいか、そして学校、公民館、地域でのこの子ども教室と平日と休日の子ども教室、実行委員会さんがなさっている土・日・休日の教室との連携を中心に話をしていければなと思っています。この子ども教室がスタートしたときは、子どもたちの安全確保と安全対策ということが日本中で大きな教育課題でした。それで、地域としてこのプログラムを通して何ができるのか、安全確保ももちろんなのですが、子どもを介しての地域づくりあるいは家庭の支援、そして地域が元気になっていく力をつけていくことができないのかというようなことを考えて皆さんとスタートしたというところです。まず、課題の中でこれまでやってきて確かに安全確保は当然のことですけど、先ほど坂本暢子さんからありました、やれることから遊び相手ということに関して、今、子どもたちに必要な生きる力ということが言われていますけど、５年先１０年先がわからない、先が読めないこういう社会でたくましく強く、そして生きがいと意欲を持った子どもを育てるには教室で何ができるのか、そして遊びなどを基本としつつ、子どもたちの生きる力をどう育てていくのか、そのためにはどういうあり方、体制が必要なのか、まずはそれに絞ってそれぞれお話をしていただければと思います。

○パネラー（小林和彦氏）

放課後子どもプランという教室で何ができるのかということでしたけど、今日は２つの放課後子どもプランがここの場にはあります。１つは学校や公民館でやっている平日のプランについて、先ほど教育

長から安全という話がありましたけど、それにもつながってきていると思うのですが、学校の中で家庭集団でのかかわりが非常に少ないし、地域の方とのかかわりも非常に少なくなってきています。それを意図的に作っていこうということなのですけど、実際、私の学校は学校でやっています。今８０人くらい登録しています。常時３０～５０人位が来ていまして、スタッフが足りなくて、ものすごく四苦八苦しています。去年やっと民生児童委員さん全員にお願いして全員加わっていただきました。それでも、今、常時スタッフは２５～２６人です。ですから、８０人を３人や４人では無理です。さっきの木次小はおそらくあの人数だと６，７人か７，８人くらいで動いているのではないかなと想像します。うちはその半分で倍の子どもをみています。スタッフが根をあげています。もうやめさせてほしいという要望も出ています。保護者の方にもお願いして、若い方にも入ってもらっているのですけど、スタッフはボランティアという形で、スタッフのエネルギーというのがものすごく大事で、ただ見ているということは簡単なことのように思えるのですが、とんでもない話でして、もう疲れるとおっしゃいます。うちは学校ですので教室があまりないのですけど、その中で動いています。特に、冬季は非常に大変でして、みているだけで大変だと、本当は何かやりたいのだけどなかなかできないということがあります。やはりスタッフの方と作っていくという、子どもを育てるということが、育てるという意識をあまり持って参加してもらってはいないのですが、両方の環境ができていないと成果が上がりにくいなという気がしています。

土日のプランは意図的な教室がセッティングされていますので目的がはっきりしていますが、そうでなくて居場所の方の放課後子どもプランは、みんなが集まってやりたいことをやろうよという発想が基本ですから、やはりそれを継続していくことは意外とエネルギーがいるのです。なぜかというと目的が明確ではないということ、ごめんなさい、言い方が、目的があるからやっているのですけど、その場で子どもが今日何をやろうかなと本人は思っているのですけど、できないこともある。それをコントロールできない、「先生方なんとかして」というような話がいっぱい出てきます。それで今、何をやりたいかという話につながっている、そのための環境づくりが大事ではないかと私どもは感じています。

〇パネラー（坂本暢子氏）

私は今、小林先生はスタッフの確保がなかなか難しいとおっしゃいましたけど、私の地域では意外にお願いすると快く受けていただいて、そういう苦労はありません。私が気になるのは居場所に来た子どもたちの整理整頓などのマナー、スタッフへの言葉づかいとか、遊びの中でのルールなど、ずいぶん気になることがたくさんあります。でも私たちは教育の専門家ではないので、そういう場合にどういう言葉がけをしたらいいのかなと、悩むことがあります。私たちは、気づいたことを活動日誌にメモしておきまして、スタッフ全体が集まる会で事務局がすべて書き出して話題として提供してくれますので、それを聞いて話し合って、ランドセルなどが乱雑になっているのでどうしたらいいかとか、あの子は最近精神的に落ち着いていないけれどどうしようかなど、みんなで話し合ってきたら意外にいい方向が見えてきます。家庭も学校もそうですが、私たちが周囲の大人の目で見て、専門家ではないけれども、子どもや孫を育てた経験からしてどういう風にしたら良いかということを、スタッフ全員で考え解決するように努力しております。

〇コーディネーター（土江博昭教育長）

ありがとうございました。ここで整理しますと、ひとつが私の方から子どもたちに育てたい一つの力というようなことで出した訳ですけれども、それ以前にまずはそのための体制作りが大事だと、ボランティアスタッフの方々に対して、非常に困っていると小林校長からの話しもありました。これについて確かに今２５箇所でやっている訳ですけど、それぞれ地域の差もございます。今後の人為的な体制のあ

り方、私どもの行政として非常に大きな役割だと思いますし、課題だと思っております。これについては私どもの所管ではできない訳ですけど、その点、加藤コーディネーターの方でこういう風にしたらどうだろうかというお考えはないか。あと後藤氏からとそれぞれアドバイスをいただければと思います。よろしくどうぞ。

○パネラー（加藤雄二氏）

戸惑っておりますけど、スタッフ不足に関して私がすらすら答えられたらやっている訳でして、なかなか難しいのかなと実感しております。私自身もチャレンジスクールで講師をさせてもらっていますが、そのメンバーが初期と変わっていない。同じ人がずっとやり続けているということで、なかなか新しい人の発掘が難しいという現状です。一つ必要ではないかと思うのは、やはりこの危機感をどう皆さんに伝えていくのか、今日来ていらっしゃらない人に伝えていくかです。安間課長の話にもありましたけど、今日ここに来ていらっしゃる方々は皆さんよく分かっていらっしゃる方ですが、今後、子どものためにたくさんの力が必要だということがどうしたら皆さんに伝わるか、それがしっかりできればもっとこの活動がより良いものになっていくと思います。私は教育支援コーディネーターという立場でいろいろな活動を少しずつですがさせてもらっています。例えば、幼稚園に行って PTA 保護者会に出させてもらっています。そういうところで思ったのが、例えば、保護者の参画に向けての、一つの攻め手といいますか、幼稚園の保護者会は参加率がいいです。次に、小学校、中学校とだんだん参加率が減ってきます。それって何だろうと思ったりします。だから、そういう保護者の組織が、初めてできる幼稚園というところでもっとみんなで何が必要なのかとういことを話し合える場になればいいと感じます。まだ子育てが始まったばかりということでいろいろ大変だと思いますけど、同じ悩みを抱えている人も多いと思いますし、発達障害や食の大切さなどの保護者に伝えるべき課題を含めて子どもが大きくなるにつれて、地域の力が必要になるということを訴えかけていくことが必要になると思います。

○パネラー（後藤康太郎氏）

平成１７年度の終わりに、取り組みにかかわっている皆さん方にアンケートをさせていただいております。そのなかで仕組みづくりに関わる３つの課題が必ず出てきました。１つ目は、先ほどからお話にありますボランティアの確保という課題です。２つ目は、保護者との関わりです。３つ目は、仕組みに関係することですので皆さんに直接関わるかどうか別として、運営経費をどう捻出するかという課題です。またそれとは別に、運営に関わる２つの課題も必ず出てきます。１つ目はプログラムをどうするのか、何を子どもにさせるのかという課題です。もうひとつは先ほど坂本さんからのお話にもありましたけど、子どもにどう接するか、マナーや態度などをどう指導していくかというものです。この仕組みに関わる３つの課題と運営に関わる２つの課題というのはどこ町に行っても、どこの県に行っても必ず出てきております。私は現場で実践しているわけではないのであまり説得力がないのですが、例えば、ボランティアの確保に関わるところで、こんなことをしているところがあります。それは、中学校の総合的な学習の時間とコラボレーションして、中学校の総合的な学習の時間に地域活動、地域貢献の学びの場としてボランティアで、自分の中学校の隣の小学校へ行き、子ども教室のスタッフの補助をするわけです。あるいはその子ども教室に少し上のお兄さんとして関わる、子どもたちと一緒に遊ぶという関わりをします。ボランティアは少なくてもそういう子どもたちがたくさんいることで人の不足が若干緩和されます。あるいは保護者の参加という部分で、保護者というのはなかなか関わりにくいですので、たとえば、掃除当番を決めて、保護者の方が必ず最後に掃除をして帰るという事例もあります。またプログラムは何をするかということについてもいろいろ議論が別れていて、自由な遊びの場があればいいという所もあったり、いや、何かしらの教育的な視点を持ってやったほうが良いといわれるような方もあ

ります。もう少し議論を待つというよりも、それぞれの地域ごとの特色を生かして、あるいは地域ごとのスタッフの皆様の考えの中で展開していくべきものかなと感じてきています。その中で、先ほど、校長先生のお話にもありましたスタッフの確保にしても、プログラムの中身にしても、それがしっかり整備されるような地域の環境を作っていかなければいけない。このプランが出たときに、このプランはこういう形で進めますよという形を県の方で先導するよりも、むしろ小学校レベルでその議論の場を作っていただくことに力を入れようと考えています。今、お手元に、宣伝になりますがパンフレットなどを作らせていただいていまして、こんな形でやりましょう、ではなくて議論し、検討する場を持ちましょうということについて、一生懸命あちこちでお話させいただいているところです。是非、皆様方の地域でも検討の場の設置を進めて欲しいものです。なかなか言うは易しで、実行することは難しいと思いますが。

○コーディネーター（土江博昭教育長）

お二人から、ご発言いただきましたけれども大学生とか島根大学の方も加わって 1,000 時間体験をやっております。高校生、中学生の参加のあり方等を含めて、このスタッフの確保あるいは体制づくり、そしてまた、まもなく皆様にもお伝えできると思いますけど、これから小学校、中学校を中心とした中学校区を中心とした地域本部を置く、という学校支援の本部の中で、このデータを中心とした地域の体制づくり、ボランティアの体制づくり、こうしたことを市あげて取り組みたいと思っておりますので、そういったところへこの支援体制ができればなという風に考えております。

そこで先程、坂本暢子さんが言われましたように、確かに子どもの居場所はこうしたことが中心で、また何か目的があるとなかなかスタッフの方も大変なわけですが、一方では教育的支援も必要であると、私も坂本暢子さんが日登の公民館でなさったことも伺えましたけども、子どもたちには、例えば、ステージの所へかばんをキチンと置きなさいとか、履物はキチンと揃えなさいとか、こうした基本的なマナー生活習慣が大事で、子供たちに育てたい力として、身に付けたい力としてやっているのだよ、というようなことをおっしゃいまして、これは非常に重要なことだと思います。先程生きる力と大きなテーマを掲げたのですが、その基本的ことですね。こういったことを進めていかないといけないのかな、そのためには学校教育とこの子どもの教室は目標の共有化が必要ではないかと思うのですが、その点、小林和彦先生いかがでしょうか？

○パネラー（小林和彦氏）

今、私は学校の教員という立場ですけれど、今の、日登でやっておられるような活動になったというのは、きちんとスタッフ全員と課題を出し合って、どうしようかとその積み上げがあってできていると思います。なかなかスタッフ会議はそんなに頻繁に開けないのが実情ですし、今うちの学校でも目の前で見ていますと教員が指導するのか、スタッフが指導するのか非常に悩んでいるし、目の前を子どもが動き回っているのに教員が黙っていると、スタッフの人にどうするのと言われます。それでスタッフ会議をするのは限度があるし、今、必要性を感じているのは保護者会です。それで保護者会という組織を作る気が本当はないのですけども、やっぱり何か必要かなと。保護者の想いがいっぱいありまして、スタッフの方も学校もそうなのですけど、自分たちの思いを伝えたい、今の課題は何かを伝えたいと思うのだけど伝えるすべがない、学校の方で伝えて欲しい。教員に伝えて教員が学級で子どもに伝えるということになると、やっぱり徹底はしないので、やはり保護者会が必要かな、迎えに来られても挨拶なしで帰られる親がいっぱいいるのでどうしようかなとスタッフが言う。それについてどうやろうかな、解決策がすぐ出てこない。結局それは子どもの今の生きる力に繋がる、親の姿も出てくる、親が教室に上

がって行って子どもを迎えに来た時に、今日はどうだったか声かけをして、スタッフの皆さんに「本当に今日はありがとうございました。」と言って帰って、一緒に手をつないで帰る姿がまわりにあれば、そこで子どもたちにも当然、あ、そうなんだとみんなで感じて、お母さんもみんなこういう風にして感謝している気持ちが伝わってくるのですけども、もう全然、サーッといなくなってしまう様な状態が続くとこれはもう大きな課題になってきまして、どこから条件整備しようかと、帰るときはきちんと終礼をして帰ろうとか、そういうところからやっていくのですけど、やはり保護者会がほしいなというのがスタッフの想いです。

〇パネラー（坂本暢子氏）

私たちのところでも、スタッフの想いが保護者の方に伝わらないということで、どうしたらいいかと話し合いました。保護者会に夜集まってもらって新たな会合を持つと、とても負担になるだろうから、せめて今、小林先生が言われたように、迎えに来ても駐車場の方で待っていて、子どもが出てくるのを待って連れて帰るというのが多かったので、私たちは大きい体育館のところで活動しておりますので、いくら保護者の方が入られても大丈夫なスペースがありますので、迎えに来られた方は必ず中に入って最後の５分、１０分、子どもたちと遊んだり、片付けの様子とか見てもらってお帰りいただいたら、子どもたちの日々の様子もわかるし、スタッフの苦労もわかっていただけるのではないだろうか。そういうことでやろうと、校長先生から保護者にお手紙を出していただきました。しかし、まだ日にちが経っていませんので、なかなか中に入っていただけなくて、これから私たちも「中に入って見てみて！」という風に働きかけていき、小さなことから保護者と連携をとっていきたいなと思っております。

〇パネラー（加藤雄二氏）

知らない間に保護者さんとお話する機会もなく出ていかれるというパターンが非常に多い現状であります。それと、保護者さんに入ってもらっていても、自分の意図していること違う場合もよくあります。例えば、私は子どもたちに体験させたいと、料理をつくる場合、小学校１，２年生だから、チヂミや、から揚げを作るのに危険なこともあるけど、子どもたちも十分出来ると思ってプログラムを組むわけですけども、保護者の方にちょっと見ていてくださいと言ったら全部作ってしまっていたりするのです。何のためにやっているのかがよく伝わらないことがあって、他にも保護者さんにキャンプとか来ていただいてもいつの間にか子どもが遊んでいて、大人が一生懸命作っているということを、多分みなさんも見られた経験あるのではないかと思います。だから、私も教育委員会に入るまでにいろいろな体験活動をさせてもらっていましたけど、体験活動自体がわりとそういうところがあって、「キャンプやりましたＯＫです。」みたいな感じがあったと思うのですけど、やはり教育委員会に入って、何のためにやるのかということが、自分自身に明確になってきました。だから、それを伝えないと解からない、明確に伝えることが必要かなと、例えば平成１７年に私たちは、生活のリズムを良くしようと生活実態調査をしたところ、休日に８時間以上テレビとかゲームとかしている子どもがどれだけいるかアンケートをとると、１０％以上テレビやゲームをやっている、雲南市は非常に高い率でした。これはやっぱり危機だと思いました。話はちょっと脱線するかもしれませんけど、教育支援コーディネーターとして初めての夏休みを迎えるにあたって、何かしようということで始めたのが「ふるさと雲南キョロパスポート」です。これは、市民バスを無料で子どもたちに乗り放題、小学生５，６年生対象に、図書館や体育文化施設とかにできるだけ行ってもらって、活動的に夏休みを過ごしてもらうというこにしました。そして実際に１６０人ぐらいの方に申請していただきました。で、終わった後にアンケートを取るとこれはまぁ良かったのだけど、兄弟で参加できないとか、実際に使いたいけど使い方が良く分からないし、便も少ないしどこに行っていいか分からないというようなことがありました。今年度２年目は、３００円の

料金を取ったのですけど、小学１年生から中学３年まで全員使って良いということにしたら約４００人の希望者があり、随分と増えました。それで何をやって良いか分からないとか危ない、危険だと心配だったというのがあったので、まず親子チケットということで、親子でお試しで乗れますよというチケットを作りました。そして、何をしていいか分からないということで、夏休みにいろいろな活動を体験してもらいたいなと思いまして、それは雲南市教育委員会だけでは難しいなと思ったところに今回の文化体育施設利用放課後の事業がありまして、いろいろなたくさんの活動を提供していただきました。夏休みでの７～８００人の子どもが参加するような大きな活動になりました。これは非常に雲南の子どもにとって良いことだなと、素晴しい活動だと思いました。これはうちの担当の教育委員会だけでは出来なかったことで、それにこういったプログラムというのは専門性の高い活動でした。学校でやる居場所づくりというのは、学校と対になって作り上げていくものだと思います。今回のプログラムというのは、専門性を生かした体育文化施設を開放利用して専門性をもった講師・コーディネーターによる活動だと、そして広域的な活動で両輪のあるということが素晴しいと思っています。

〇コーディネーター（土江博昭教育長）

今日の課題、テーマの１つである「わくわくプログラム」と地域を中心とした子ども教室の連携、そのためにどうやっていくかということをご答弁していただきました。こうした良い体験の場所、経験の場所があり、やはり子どもたちが参加しなければならないという実態の中で、小学校の低学年が参加率は高いのだけれど、年齢が上がるにしたがって低くなる。これは部活やスポーツ少年団等の活動があるので、これも意義ある活動なのですけれど。ただ今の子どもたちを見た時に、雲南市の高校生に私もお話を聞いたのですが、天の川を見たことがない子どもとか、あるいは子どもたちの自然遊びがどんどん減ってきて泥の中を裸足で入るのを嫌がる子どもとか、幼児でもバッタを捕らえることができないとか、すぐに諦めてしまうとか、川の中へ危なっかしくて入ることができないというような変化がたくさん出てきています。そんな中で自然体験、生活体験を通し様々な成長をさせないといけない、それがひいては大きく子どもの生きる力になるのではないかなと考えたわけです。特に、総合的な学習の時間が減ってきた中で子どもの居場所、地域での社会教育の場でも体験活動が非常に重要だと思うのですが、まだまだ課題が多いと、こういったところをどういう風にお感じになっているのか、またどういった学校とのかかわりの中でどういうことを見出していったらいいのかということを、それぞれの立場でお願いしたいと思います。

後藤氏から順番にお願いします。

〇パネラー（後藤康太郎氏）

まず、今日前半お話を伺わせていただいて、雲南市の取り組みに関して申し上げると、１つは平日に学校や公民館を中心にしている子どもの居場所づくり事業がありますが、１８年度の子どもの居場所づくりの実績は、全県でのべ２８万５千人の子どもが参加するなかで、うち１２万人が雲南市の実績です。どれだけ雲南市が島根県の子どもの居場所づくりを牽引し、ご尽力いただいているか、本当に感謝しております。そして１９年度は主に平日においては、地域で根付いたこれらの取り組みをさらに専門性をもった社会教育施設や環境の整った文化施設でバックアップしていくという大変すばらしい取り組みをしていると考えております。なかなか普段公民館でできないような活動を体育館や文化施設でより専門的な視点で取り組んで、それがひとつの市レベルでカレンダーになり、先ほどあったキョロパスなどを使って行くことできる。若干の課題がありながらも縦横の軸がつながっている事業として組み立てられていることが大変素晴しいと思います。今、全県でそういう取り組みが広がりつつありますけど、スポ少や他の事業、あるいは放課後児童クラブとの連携など問題もあります。スポ少に関する議論は現在

県のレベルでも進めてはいますが、解決策というのはすぐ出てきません。スポ少にスポ少の理念や目的があり、それをやめて遊びの場をというわけにはいかないです。しかし今、スポ少の取り組みの中で、たとえば野球をもっと小さい子どもに教えようということで、この日はスポ少の練習のかわりに、子ども教室に野球道具を持って出かけ、野球の仕方を教えようという取り組みもはじまってきました。少しずつ、スポ少との融合という取り組みが見られます。それは、小学校レベルでそういう人たちが集まり、小さい子どもにスポーツなどを教えられるような取り組みをしたらどうだろう、などと話し合えるような環境を作っていくことが必要だと思います。そこから、連携したいろいろな取り組みにつなげていくようなことが子ども教室の理念だと思います。雲南市さんは、トップリーダーですので、少し次のステップの宿題とすればそのようなところだと思います。

○パネラー（小林和彦氏）

文化体育施設を活用した子ども教室わくわくプログラムが実行委員会さんの方から、校長会の方に説明がありました。夏休み前のキョロパスもありました。実際には私達の反応としては先が見えなくて、いったい何なのか？そういう状況が最初の状況でした。おそらく今もアンケートもしていただいていますが、知っている、知らないの範囲では、これが（わくわくプログラムパンフレット）学校へ来ますので、おそらく学校の教員は知らないのはほとんどいないと思います。ですけどもこれが学校とどういうかかわりを持つのか非常に難しい。私はご縁がありまして９月からこの教室の講師をしていまして、いろいろな視点から子どもを見ることができまして、このねらいにつながることが理解できました。最初マジック教室をやりましたときは４，５人ぐらい来ました。ほとんどが木次小学校で、土日連続あったのですけど、土曜日、木次小学校は学校がありました。それで明くる日は、木次小学校だけがどっと来て５、６人だったのです。次が７人になって８人なって、とうとう１１月ごろになると２０人ぐらいになりました。ちょっと根をあげました。なぜならば一人ではできないし、口コミでどんどん広がっていきました。雲南市の大東、三刀屋、木次、加茂とほとんどが３年生以下でした。たまに５年生がポツンといる状態でした。マジックを見せるのは簡単で何百人来てもいいですが、実際に簡単に子どもにできるマジックを作らせたり、練習させたり、新しく来た子どもにまた同じマジックを教えなくてはならず、根をあげました。そこで事務局さんに定員を１０人ぐらいに減らしてよと言ったら保護者から、趣旨に反するじゃないかと言われたのが実際の状況でした。この間、赤名から来ている子どもがいて、それも口コミで聞いて来たらしくどうなのかなと思いました。そのときに感じたことは、私の教室に関してですが、これだけたくさんの教室が開かれているのに子どもは受身で参加していることです。つくづく受身だなと感じました。また、低学年が中心になっている教室は課題が多いのです。なぜ低学年しか参加できないかなと、それが１つの課題です。私も来年ありますかと事務局さんに聞いたところ、来年もやると言われましたので、じゃあ来年どうするかと思ったときに、そのことで改善して欲しいといったのですが、集団として子どもたちに何か身に付けて欲しいのです。マジックも私が作ったマジックを子どもがするのではなくて、マジック好きになれば本屋さんに行ってマジックの本を買ってくるだろうし、この間やって練習したマジックを家でやったら評判良かったので、みんなでやってみようとか。今度マジッククラブで何人か行けたら老人ホームへ行くよとか、そんなことができるような、そうしないとこの教室の質的な高まりが少ないかなと思っています。場合によってはカルチャースクールではないので、ちょっと難しい面もありますけども、もしかしたらそういう性格のものも入らないといけないのかなとちょっと思ったりしています。ですから、実行委員会さんの方が中心となってやっていただいているこ

の教室は、もちろん教室数が増えることについては、ボランティアスタッフだけで維持していくことは大変だと思うので、それなりの努力をして考えていかなければならない。もう１つはこの教室の認知度を広げて行かなければならない。ちなみに私の学校では２年生の学級で今日はマジック教室のことで大変でしたと話題になります。その明くる日は何人も聞きに来ました。ところが他ではまったくです。でも良いところは雲南市のいろんな学校からいろんな子どもが来ているので意外と面白いし情報交換が出来るところです。私も教員ですので、つい子どもからひっぱってこちらの子どもからこっちの子どもにふったりしていますので、子どもも黙ってないでしゃべるのですけども、意外とよその地域とか学校の情報が入ります。これは平日の放課後のプランにはないことだなと思っています。５，６年生はスポ少とか結構他の学校との関わりがあるのですけど低学年はほとんどない、そういう環境を作ってあげることもある面のねらいの中に入れても良いのかなと感じて期待はしているのですが、来年は１０人ぐらいにならないといけないなと思っています。

○パネラー（坂本暢子氏）

私もお二方と同じようなことを言うようですが、この休日、土日を利用した子ども教室がスタートするときにお話は聞いておりましたので、とても興味を持っておりました。こういうものが（わくわくプログラムパンフレット）配られている割には一般の人が知らないというのが現状だと思います。子どもたちが少なくなり、スポ少や部活動をやるにしても、スポーツが得意ではないけれど、付き合いでスポ少に所属している子もたくさんいます。スポーツは苦手だけれど文化的な何かを学びたいとか遊びたいというときに、地域を越えた所で選択肢がたくさんあるということは幸せなことだと思います。先ほどいわれたように、木次の子どもも加茂の子どもも一緒になってやるということは新しい出会いで、人間的にも大きくなれるのではないかと思います。また、新しい趣味が増え、心が豊かになると思います。この子どもプランがうまく展開するかは、既にお膳立ては出来ているのですから、いかにしてＰＲするかで効果が出てくるのではないかと思います。それから、もう１つ、保護者との連携に関して、なかなか保護者の方に私たちの思いが伝わらないということで苦労しますけど、ＰＲというか、伝えることが大事だなと思いました。私のところで、最初のころに餅つきをしました。そのとき、お父さん方は出てきて何も手伝わずストーブにあたられて、スタッフと子どもだけで作って、食べるときは一緒に食べたのですけど、なぜお父さんたちは手伝わないのか、おじいさん、おばあさんみたいなスタッフが一生懸命餅つきをしているのにと思いました。やはり、それは、保護者の控えめなところというか、自分たちがしゃしゃりでてはいけないという思いがあったと思います。その次の年に、私たちは一緒にやりたいと伝えたら、お父さんもお母さんもきちんとエプロンを持って手伝ってくれました。このようにスタッフの思いをもっと発信し、保護者や学校に伝えていけばかなり問題は解決していくと思います。

○コーディネーター（土江博昭教育長）

加藤雄二さんが話される前に少しテーマを与えます。今、それぞれ出ていますけど、平日の子どもの居場所と土・日・祝日子どもの居場所のそれぞれの役割分担があるのではないかということと、子どもたちにあるさまざまな選択肢について、キョロパスや夏休みにしたさまざまな体験、雲南市の良さを発見するという企画をされたのですけど、そういった点を含めて、より多い子どもたちがこういった選択肢に参加できるような視点から話をいただければと思います。

○パネラー（加藤雄二氏）

役割分担についてはいろいろお話になったように、わくわくプログラムについては専門性の高いもの、広域性のあるもので、学校の居場所というのはホームタウンというか心のよりどころみたいなもの、子どもたちが普段安心していける所、安心して行ける所でどう過ごすかというのは学校の状況によって異

なりますけど、安心な場所であってほしいと思います。選択肢が増えるということは非常に良いことで、こんなことが私の子どもの時代にできていたらいいなと思うくらい、たくさんのメニューがあります。でも一方で、わくわくプログラムの講師はほとんどが雲南市内の講師です。これからの課題、展望としてはぜひ、その方々が学校に入っていただきたいと思います。そういうつながりを持つとさらにこのわくわくプログラムは良くなると思います。夏休みの毎週木曜日はバスの日にして、雲南市でバスツアーをして、今年は１００人を越えるくらいの参加がありました。人気なコースと不人気なコースと極端に分かれました。これも小学生低学年が主でしたけど、最初のころは、一応バスの時刻に合わせて集まれるようにしていたのですけど、実際は保護者の方に送り迎えしてもらっていました。でも、最後は掛合の滝をみるツアーでしたが、参加者の多くがバスに乗ってきました。最後にそういう姿を見させてもらって感動しました。雲南市の子どもは交通弱者で、保護者の方が送り迎えすることが当たり前で、バスを選択することがなかったのですが、夏休みに自分でこのバスに乗るという選択をしたことは、子どもたちの成長にとって非常に良かったと思います。それから、雲南市を巡ってみると良いところがたくさんあります。それを発見できたということは非常に良かったです。私自身も都会に出ていまして、地元に残りたいという気持ちがあまりなく、都会に出ていて帰ってきたのですが、以前なら県外の友達が来て、紹介するのは松江だったり出雲だったりしたのですが、最近、雲南市のことを知ると、雲南市に来てほしいと思うようになりました。だから、子どもたちにもふるさとを知るという体験をこういったプログラムで感じてほしいなと思います。

○コーディネーター（土江博昭教育長）

ありがとうございました。そろそろ時間がきておりますけど、ここでそれぞれのお立場でこういうことを放課後子ども教室、土日の子ども教室に対しての期待、願いなどをお聞かせください。よろしくお願いします。

○パネラー（後藤康太郎氏）

地域の教育力の回復、再生というのが一番の課題であり、ぜひともたくさんのみなさんに参加していただいて、この取り組みがより発展していくことが一番大切であります。そのためにも、先ほどからの話にもありましたが、運営・検討を進める組織作り、仕組みづくりが必要だと思っています。県もこれまで緊急施策だということで、特別な経費の枠の中でお金をつけておりました。でも、それではだめだと、継続的に続けていく事業だからということで、今年から部局の枠の中に移る見込みです。この事業がある限り私たちも応援していきます。それぞれの地域で定着し、発展していくことを願っております。

○パネラー（小林和彦氏）

２つの子どものプランがありますけど、どちらも子どもは楽しみにしています。先週、風邪が流行っていたので、広場（居場所）を１週間閉鎖しました。学校閉鎖もしました。本当に子どもの行き場がなくなってしまうような状況になりました。わくわくプログラムでは子どもは目的を持って来ますから、やる気満々で来ています。それを支えていただきたいと思います。先ほど県の方からも話がありましたけど、この事業で雲南市は非常に評価されています。雲南市としては継続していき、継続していく環境ができたとき、もしかしたらお金がつかなくてもやるというところもあるかもしれません。やはり、一つの環境としては、行政の方で環境整備を実施していただきたい。そうすれば今、でてきた課題もクリアになると思います。スタッフも、子どもも口コミでやってきます。いい口コミは広がっていきます。マイナスの口コミもこれはもっと早く広がっていきます。ぜひ、そういう環境整備をよろしくお願いします。

○パネラー（坂本暢子氏）

今、地域で子どもたちの数がだんだん減ってきておりまして、少人数の子どもたちを宝物として地域で育てていかなければいけません。地域で支えるこの居場所づくり事業は大きな意義を持っており、やりがいを感じております。これは少人数の力では継続も難しいですので、ひと月に１回ぐらいのお手伝いという善意の積み重ねで、大きな力にしてこの事業が継続していくよう頑張っていきたいと思います。

〇パネラー（加藤雄二氏）

教育支援コーディネーターが取り組んでいる活動として、「きらきら雲南未来プロジェクト」があります。そこでは、雲南市の子どもたちが将来生き抜くためにふるさとを題材としたキャリア教育をやっていこうというカリキュラムを作る作業をしております。これは今年度中に作りまして、小学校、中学校の方で実施していきたいと思います。それから、もうひとつうんなん応援団として、雲南市の子どもたちの教育に携わっていただける方をネットワークでつなげたいと思っております。わくわくプログラムに参加してくださっている講師の皆さんにもぜひ、参加していただきたいと思っています。学校と社会教育が繋がるような取り組みにしていきたいと思います。応援団に入りませんかというチラシを配布しますので、そのときは名前を書いてやってほしいなと思います。子どもたちは多くの大人を待っていると今日お話がありました。登録をしていただいて気軽に学校にお出かけいただければと思います。よろしくお願いします。

〇コーディネーター（土江博昭教育長）

ありがとうございました。総括といいますか、ディスカッションの感想を含め安間課長お願いします。

〇アドバイザー（安間敏雄氏　文部科学省 スポーツ・青少年局青少年課長）

このディスカッションに参加させていただき、皆さん方の取り組み状況を私もいろいろと思いも含め、聞かせていただいたことに感謝申し上げます。やっぱりこういうところで実際お話いただいて聞くことができ、大変良い機会にめぐり合えたことに心からお礼申し上げます。

2～3 点感想をお話させていただきます。先ほど県の後藤康太郎さんの方からもお話いただきましたように、放課後子ども教室が全国で 6,300 ヵ所ぐらい行われているという話をいたしました。実際予算上は１万ヵ所ということを予定していましたが、6,300 ヵ所が事実です。ただし、これについてはもっと広げてきており、来年度については 15,000 ヵ所ということで予算化していることを報告しておきます。全国の小学校だいたい 22,000 校を超えますけど、その各校で実施していきたいということを報告いたします。それから公民館の方から何回か学校との連携ということを話していただきました。確かに考慮していたんですけど、先ほどから申し上げました中教審では学校支援ということが話題となって、今後学校支援部というものをある程度作り上げるようにしております。これだけ中学校区全国で 1,800 ヵ所ぐらいモデル地区でありますけど、これは正に学校を支援する地区指数としておりますので、今後学校支援作り、学校支援保護、そことの根分けということをお考えいただくことが１つです。

最後に施設の活用については、どんどんやっていただきたいと思いますし、この施設自体、皆さんがたの血税で建って運営されているものですから、それをどう教室に役立てていくか非常に大きな課題だと思います。

スタッフの確保の話が出ました。私は一番大事なのは皆さん方がやりたいことをまずやっていただくのが一番大事だと思います。子どもがということはありますが、ムリムリになってしまうか、というよりも皆さん方がやりたいこと、やっていらっしゃることをどんどん出していただくことが説得力もありますし、良いと思います。カラオケでプロ級の人はカラオケ得意でもいいでしょうし、マジックが得意な方はマジック、それでいいと思います。それをどんどんやっていただいて、また家でお母さん方が忙しい時は例えばお掃除のしかたみたいなことでいいかも知れません。そういうことをやっていただく。

そうすると子どもたちは吸収力が速いですから、どんどんどんどんいろいろなことを知って、そうするとやっていただいている大人の方が、もうちょっとじゃあやってみようと思い、それでご自身の生涯学習というか、子どもたちと一緒に放課後子ども教室に参加していただくことが、これからの放課後子どもプランにとって必要なことだと思います。

〇コーディネーター（土江博昭教育長）

これからの放課後子ども教室にはそれぞれの各機関に役割があると思いますので、そうしたことを基本にしながら、是非とも事業を進めてまいりたいと思いますので、今後ともご理解、ご協力をよろしくお願いしたいと思います。

今日は課題について沢山ありましたけど、その１つ１つ具体的な方策が見えませんでしたが、皆さんと一緒に課題を共有できたということが、大きな前進だと考えております。

今一度パネリストの皆さんに拍手をいただきまして、このシンポジウムを閉じたいと思います。

（司会者）

本日のシンポジウムを通して、今後の放課後子ども教室のあり方について、多くの教訓を示していただきました。

全国的に観ても、最も先進的な取組みを実践しておりますが、本日のシンポジウムを期して、更なる改善・進化をめざし、みんなの力で未来に生きる心豊かな「雲南の元気っ子」を育てることを、ここに誓い合い、本日の総合的な放課後子どもプラン推進シンポジウムを終わります。ご協力ありがとうございました。

シンポジウムアンケート

※今回のシンポジウムの内容についてご感想をお聞かせください。

・地域子ども教室から放課後子どもプランの移行したい事がよくわかった。
・パネルディスカッションのパネリストの中に、土・日の子どもプランの指導をしている遊学のスタッフも入っていた方が、よかったと思います。そうしたら、平日の子ども教室との連携や課題等についても意見交換が出来たのではないでしょうか。
・安間氏の講演、非常に分かりやすく今後の参考になりました。
・文科省の課長さんの話あり、パネルディスカッションありでよかったと思う。
・パネリストの中にＰＴＡ、特に保護者の人がいると良かった。また、ＰＴＡの参加者が多いと良かったと思う。もっと家庭へ向けてのシンポジウムが必要だと思った。シンポジウムの話にもあったがこのシンポジウムをイベントとして行うだけではダメ。
・「総合的な放課後子どもプラン」についての理解を深める事ができた。ただ子どもの居場所と体育文化施設での活動と内容が混合し少し分かりにくいところがあった。
・学校地域の現状を統計的に知る事が出来た。学社連携、もう一度見直さなければならないと思いました。私たち地域と学校関係者が一緒に話し合える機会を作ってください。
・大変意義のあるシンポジウムだった。もっと多くの方に参加して欲しかった。
・盛りだくさんな内容でよかったです。欲を言えばもう少し時間の余裕があって、もうちょっとお話を伺いたかったように思います。
・短時間で分かりやすくてよかった。
・課題がみえてきたので、今後の参考にしていきたい。
・放課後子どもプランのスタッフとして今日のシンポジウムに参加して、また明日からも子ども達にたずさわっていきたいと思います。
・安間課長のお話は、国の社会教育行政について直近にお聞き出来、非常に貴重な体験でした。
・講師の席に花を置いたり、この研修に力を入れる主催者の方の姿勢が強く伝わってきました、参考になりました。
・地域の子ども達のために、地域の人が力を尽くしておられる事がとてもよくわかりました。保護者のみなさんは、この事にもっと感謝をすべだと思います。
・具体的な話が聞けて良かった。（いろいろな取組み等）
・計画は大変よかったと思います。
・事例発表の時間が短い。
・大変良かった。
・良かったと思います。
・参考になりました。
・基調講演、事例発表を聞き放課後子どもプラン事業をやっと理解できたようにも思います。
・放課後子ども教室の今後の課題を明らかにしていただいてよかった。

※これまでの放課後子ども教室の取組みについての感想をお書きください。

・いろいろな問題点を持ちながらよくやっていることが分かった。
・雲南市がトップランナーであることがよくわかった。
・地域における子どもの存在が明らかとなった。一昔前はどこでも見られた子ども達の遊び、自然の中での活力を、今は大人が意識して設定しなければ体験させる事ができない。この事を強く感じている。
・取り組んできている子どもの姿がわかった。
・課題が見えてきたので今後、参考にしていきたい。
・スタッフに気持ちよく参加してもらい楽しく運営している。
・安心・安全な放課後になってきていると思います。
・活動への参加が遠方の子どもは難しい。
・公民館によってかなり温度差がある。

・スタッフとして初めから関わっているが、子ども達の扱いにも慣れ順調な経過を辿っている曜日が、マンネリ化したようにも感じられる。今日のシンポジウムに参加して参考になるヒントを得たように思う。
・内容的にも多様で充実しており良い事だと思う。

・スタッフの方々やコーディネーターの方には本当にお世話になっている。大変ありがたいと思う。
・ボランティアの皆さんの尽力により、よく運営されていると思う。
・毎月１回は休日を利用しているが少し離れたところに出かけるのにバス代が高くて行けない。
・継続していただきたい。
・公民館を会場に行っているが、施設が教室の場所としては不十分なので、人数が多くなると取組みの無謀がある。実施の場所の検討が必要。
・支援者(ボランティア)の熱意しだいで効果が違う。
・平日の居場所(教室)の実施についてスタッフ確保は困難であろうと思います。同情いたしますが「自分が居ないと出来ない」と気持ちで頑張っていただきたく思います。
・子どもの居場所（平日・公民館）では、学校連携で保護者への信頼も厚く、子どもの生きる力は着実に育っていると思った。

※放課後子ども教室の活動を通じて、子どもが変わったと感じた事があればお書きください。
・元気のいい挨拶ができる。
・異学年の交流が盛んになった。
・公民館に集まる子どもが、挨拶をよくするようになったことと、１番最初に宿題を終えるようになった。
・地域で会っても声をかけてくれるようになった。
・教室利用をとても楽しみにしている。
・そんなに変化はないと感じている。
・始めた当初より子どもの行儀は良くなったように思う。子どもと戸外で会った時に近づいたり声をかけてくれるようになったことが嬉しい。
・３年間の活動を通じて子ども達のマナー言葉遣いが変わってきました。地域の放課後の子ども達についての意識が高くなってきたと思われます。親の意識が少しずつ変わってきているように思えます。
・子どもの異年齢での遊びが多くなってきた。
・子どもからスタッフに声をかけるようになってきた。（出会った時）
・子ども達が地域の力を含め「ひと・もの・こと」を知る機会となっている。
・生活力がでて、動ける、参加する力が出来た。
・（平日・公民館）子どもは生きる力が高まり、郷土を愛する心情も育っている。継続してほしい。
・子どもとのかかわり方の難しさを課題に参加しましたが、充分な解答は得られなくて残念でしたが、良い勉強になりました。
・家族や親から逃げだしたり離れたりしていった。そのことについては良い面もあり悪い面もある。

※今後の放課後子ども教室の活動に期待する事をお書きください。
・保護者・一般市民全体に子ども教室を理解して積極的に子どもを送り込む体制づくりが大切と思います。
・実施する項目等を示してもらったがよい。（スポーツ・遊び・料理等）
・土・日・休日放課後子ども教室を吉田・掛合方面の子どもにもよろしくお願いします。
・少子化の中で安心・安全に活動が出来るように地域の支援、県・市の助成を期待します。
・ボランティアさんを充実させて長く継続して欲しい。
・もっとＰＴＡの組織を活用して欲しい。
・これまで同様、様々なイベントを組み、新鮮さを失わないでほしい。（土日）
・保護者のニーズに合った居場所づくりを進めることが子育ての支えで、地域力・家庭力の向上につながると考える。
・スタッフの減少、事務局の負担を考えると難しいと思う。様々な形での支援をお願いします。
・少ない子ども地域で育てた意味でこれからの活動に期待しています。今日のシンポジウムに参加して土・日・休日の子どもプランの講師を招いてとか中学生とかの参加を得るという意見は大いに参考になった。
・プログラムの多様化。
・交通の便の悪い地域への出前活動的なこと。
・活動補助金アップ。
・雲南市の中でのスタッフの交流会又は研修会。
・スタッフの方の積極的な参加。
・保護者の意識改革。

・自然体験の積極的な導入。
・ふるさとを教える。
・中学生、高校生のスタッフ登録によりスタッフの確保・小中高生と地域の方とのふれあいごとができふるさと教育の推進あるいは地域の活性化にもなると考える。
・学校教育との連携を更に推進し子ども達がよりよい、活用しやすい子ども達の育ちをサポートしていける事業にしてください。
・土・日 休日放課後子ども教室を吉田・掛合方面の子どもにもよろしくおねがいします。
（交通手段のよい方法）
・人数は少なくても、一人ひとりを育てるためには続けてほしい。

※放課後子ども教室のこれからのあり方・意見などあればご自由にお書きください。
・スタッフの意見交換会の場もあってよいと思います。(各教室の情報交換会)
・スポ少の活動も含め幅広く子どもの放課後のあり方を考える事が大切だと思います。
・木次の居場所における指導員・講師が年配の方が目立ちましたが、それに加えて大学生・青年たちが、指導員として参加する必要があることを強く感じます。年配の方だけではジェネレーションギャップもありますし、子ども達に大きな活力を与えるにはどうしても青年達が必要だと思います。そのあたりの企画取り込みを進めていただきたい。
・平日の居場所と土・日の居場所(文化体育施設)との連携のあり方。
・予算について、年々減少する様な事が無いようにしてもらいたい、増加をしてもらいたい。
・様々な討論が出来たらと思います。
・スタッフの確保、ボランティア的要素もありますがスタートから謝金がありましたので予算の確保も大きな課題だと思います。
・市内での研修会を希望します。
・ボランティアさんの充実が一番だと思います。
・文科省へ研修に行かれた方の報告等をしてもらいたい。
・今、補助金があるからやるという活動ではいずれダメになる。
・もっとこれまでやっている活動(スポーツ少年団活動・子ども会活動・公民館活動)を援助・支援する事を考えてみてはどうですか？もっと地域に密着したものを！！(総合型スポーツクラブの動きも同様です！)
・掛合地区には活動拠点がなく、子どもたちは各スポ少活動に勤しんでいる。事業活動に地域の格差があるがそれを補う手段が必要。（土日）
・統合後にも柔軟な対応が望まれる。（平日）
・学校との連携をとっていくにはどうしたらいい？
・地域で自主・独立してという形が望ましいだろうが今後とも物心両面での行政支援が必要。
・施設での教室を開催の基本にしながら、出前教室の開催も考えられるのでは？ただ様々な問題が考えられるが・・・。
・(土日)子どもは準備された活動に受身で参加。子どもに育てたい力は自分たちで創造する力と考えた時、もっと主体的に考えながら思考錯誤しながら体験する場の設定が今後は必要なのかもしれない。
・わくわくプログラムに参加する為にバスなどを用意すればよい。
・必要なのでこのまま進みボランティアに報酬を確保する(どんなに少額でも良いので)
・中学生が小学生に出前活動するなら、各教室からの出前活動があってよいと思います。
・保護者とのかかわりの大切さ、まず話し合いの場所づくり。
・学校と地域が密接になることを大切にしたい。

１３．関係者レポート

〇雲南市放課後子ども教室の取り組みについて

田中　昭夫（島根県放課後子ども教室推進委員会委員長・島根大学教授）

〇「放課後子ども教室」について

重原　伸一（ジャーナリスト）

〇文化体育施設利用の放課後子ども教室活動からみえてきたこと

佐々木　弾正（社会教育アドバイザー）

〇「遊学」の復権に期待

吉岡　登（家庭教育アドバイザー）

〇学社連携に向けた大いなる期待

藤原　克朗（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員・市文化団体代表）

〇子どもの育ちを地域で支えるということ～今後の放課後子どもプランについて～

後藤　康太郎（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員・社会教育主事）

〇放課後子ども教室の実践

安食　厚（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員・市公民館館長会代表）

〇「地域の思いはひとつ」

坂本　暢子（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員
・市子ども居場所づくり実行委員代表）

〇放課後子ども教室に思う！

小林　和彦（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員）

〇文化体育施設を利用した子ども教室の取り組みについて

石橋　雄一（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員）

〇子どものために何ができるのか！

加藤　雄二（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員
・教育支援コーディネーター）

雲南市放課後子ども教室の取り組みについて

田中 昭夫

◆ 乳幼児・児童の生活は今

最近の乳幼児と児童の生活と学習に関して感じることは、第１に、生活習慣や生活リズムの乱れが生じているということである。乳幼児のうち夜１０時以降に就寝する子どもの比率が世界的規模で比較しても極めて高く、起床時間もやや遅くなっている。多くの子どもは、園や学校の開始時間が一定であるために、起床時刻は、あまり遅くならないが、そのかわり睡眠時間が短くなっている。睡眠時間の不足は、成長ホルモンやメラトニンの分泌に悪い影響を及ぼし脳の成長に良いとは言えない。また、朝食の欠食、園や学校での元気の無さ、キレル行動、学力の低下や精神的不安定に結びついていることが指摘されている。したがって、こうした子どもの生活を改善しようとして全国規模で早寝早起き朝ご飯運動が展開され、雲南市においても、早寝早起き朝ご飯運動の全国フォーラムが開催され、盛況の内にその幕を閉じたことは記憶に新しい。この取り組みは、一時的なものとして終わらせず、園・学校・家庭が協力して継続的に行うべき重要な課題である。

第２に、子どもの生活や遊びが室内での受け身的なものになっていることである。遊びの室内化ということが言われ出して久しい。全国規模の調査を見ても、雲南市の調査を見ても、週末や休みの日の遊び場として自分の家の中や友だちの家をあげる場合が多い。遊びの内容もＴＶやビデオの視聴、テレビ・ゲームを行う、漫画を読むなどの静的なものになっていることである。家族で出かける場合も地方では、車を使用する場合が多く、歩く生活が不足しているという実情もある。こうした生活は、子どもに何をもたらすのであろうか？一つは、運動能力の低下ということであろう。これは、既に幼児から始まっており、砂利道で転んでも反射的に手が出ないために、顔面のけがをする、まっすぐに走れない等の反射神経や調整力の欠如につながっている。

昨年、１２月１７日のＮＨＫクローズアップ現代では、「身体が動かない～子どもの運動能力に異変～」を放送した。それによると、子どもの中に、ボールを前に投げられない、転んでも手をつけず、顔面を打撲するなどの症状が現れているという。また、文部科学省の調査では、走る、跳ぶ、投げるなどの基本的な身体能力が十分備わっていない子どもが急速に増加しているという。これは、以前から指摘されてきた生活の変化、つまり、車での移動、遊びの室内化、戸外で身体を動かして群れて遊ぶ機会が減少していることが影響していると思われる。

第３に、生活の中での自ら関わる体験の不足、受動的生活の蔓延化ということである。ＴＶの多チャンネル化、デジタルＴＶ放送の開始、ビデオやＤＶＤの普及、携帯電話の普及、パソコンやインターネットの普及に伴いテレビや情報通信機器への受動的接触は増加したが、自然や物や人に関わる生の体験が不足しているという現状がある。

体験の効果という点からすれば、青少年活動研究会が平成１０年に行った調査結果が興味深

い。全国４７都道府県の１万人にも及ぶ小中学生を対象に調査が行われている。それによると、子どもの疲れが学年の上昇につれ増加していることが指摘されている。また、肯定的結果としては、お手伝いをする子どもほど，道徳観・正義感が身についている、生活体験が豊富な子どもほど，道徳観・正義感が身についている、自然体験が豊富な子どもほど，道徳観・正義感が身についている事が指摘されている。このことは、子どもの自然体験、生活体験の豊かさが心の教育につながっていることを示唆している。著者は、小学生を対象に家庭での手伝いが、思いやりの心や責任感を育てているかを研究している。その結果によれば、幼児期から様々な手伝いを行っていることが思いやりの心や責任感を育てていることを実証した（田中、1997）。

人や物に直接関わることによってどのような変化が起こるのであろうか？興味深いのは、東北大学の川島隆太氏らの研究である。簡単な計算をすることが脳活動を活性化すること（百ます計算の効果は脳活動の活性化か？）、携帯電話で話すよりも直接会って目を合わせて会話することが脳活動を活性化すること、音読することが黙読よりも脳の活性化に効果があることなどが指摘されている。特に、情動の抑制、言語的・非言語的コミュニケーション、記憶や学習、思考や創造性、やる気、自発性を司る脳の前頭前野の活性化に寄与することが光トポグラフィーを用いた研究から明らかにされている。

◆　雲南市の総合的放課後子どもプランについて

上述したように、子どもを取り巻く環境や子ども自身の生活が激動するなかで、家庭や地域の子育て力・教育力の低下が指摘されるようになった。他方、子どもに関する様々な事件や犯罪の多発から、子どもたちの放課後の安全や安心に対する意識が高まってきた。

児童の放課後については、従来からある、厚生労働省が所管する放課後児童健全育成事業に加えて、子どもの居場所づくりとして、文部科学省の放課後子ども教室推進事業が行われてきた。平成１９年度からは、両者が地域の中で連携協力しながら総合的・体系的に推進される放課後子どもプラン推進事業がスタートした。島根県・島根県教育委員会としても「子どもたちのこころ安らぐ放課後や休日のために　島根の放課後子どもプランについて」という事業のガイドラインを作成するなど子どもの放課後のあり方に対する関心が高まっている。

雲南市は、平成１６年度から子どもの居場所事業を雲南市子ども居場所づくりとして学校施設等を利用して異年齢や地域の方々の交流の場として居場所づくりが展開されてきた。

さらに、平成１９年度から、雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会が文部科学省の「総合的な放課後対策推進のための調査研究」事業に応募し、テーマ：「感育」、「歩育」「健育」「徳育」のもとで事業を実施している。とくに、土曜日、日曜日、祝日及び長期休業中の居場所としての機会提供を行っている。

事業内容は、スポーツ活動、文化活動、地域の伝統文化活動、地域を知るための活動など多彩な活動が組み込まれている。

事業の骨格や「わくわくプログラム」、アンケート結果から読み取れる現状について幾つかのコメントをしたい。

第１に、事業を実施する場合に、既存の地域資源や地域人材を有効に用いている点は、高く評価できる。今日、もっと足下の地域の資源を見直し、それを価値づけて地域を見直そうとする動きが活発になっている。灯台もと暗しではないが、意外に、地域で近くにありながら見逃している施設や場所、人材があるはずである。学社連携というということばがあるが、家庭・学校・地域社会が子どもを育てる場合に、既存の地域資源や人材を発掘し地域活動に参画していただくことは大切なことであると思う。

第２に、本年度は、初年度であったこともあり、不参加の理由として事業を知らない子どもも少なからずいるように感じる。今後、学校や様々な市の広報媒体を用いて保護者や子ども自身に活動内容を知らせていくことを期待したい。

第３に、地域の神楽や和太鼓など地域の文化活動が思いの外人気を集めていることに注目したい。地域の伝統文化の担い手である青年や成人は、日頃勤めで地域を離れていることが少なくない。したがって、それを受け継いでいく人が活動するためには、土日や休日に限られてくる。そうした伝統的文化活動に幼児や小学生の頃から関心を寄せてくれることは、少数ながら将来の後継者となるべき素養をもつ人材を育てていることになる。

第４に、保護者のアンケートの結果に現れているように、このプログラムは、異年齢の友達との遊びや学び、様々な地域の大人との異年齢の関わりがあることが有効だとしている。著者は、子どもが地域の中で、様々な大人と関わることが子どもの育ちにつながると考えている。特に、長い経験と知恵を持つ高齢者との関わりは、子どもにとっては、良きお手本になりうる。孫のような子どもたちにとっては、優しいおじいさんおばあさんであり、しつけの面では、きちんとしている姿に子どもが接することは、よりよき手本になりうる。

第５に、保護者アンケートの結果に表れているように、この事業が日頃の近隣での子どもや保護者の遊びや生活によい影響を与えていることが伺える。「体育・文化施設が気軽に利用できる」を除けば、異年齢での遊びの増加、ルールを守り集団で協力的に遊ぶ、屋外遊びの増加、遊びを考え出す、相手を思いやれるようになったなど子どもへの積極的な変化の回答がみられる。

今後、こうした調査を通じて事業の実施の効果を検証し、子どもの豊かで安全な放課後の保証していけるよう努力していくことが期待される。

（島根県放課後子ども教室推進委員会委員長・島根大学教授）

「放課後子ども教室」について

重原　伸一

昨年７月の夏休み、雲南市の文化体育施設を活用した「放課後子ども教室」を実施するにあたり、実行委員会の並々ならぬ熱意を感じた。

実行委員長を務めている（株）遊学代表取締役の多久博氏は私のインタビューに答えて、「子どもの居場所づくり」の制度変更に全国の地域や学校が困惑している中、「解決策のヒントになると思う」と自信をのぞかせて事業に臨んだ。

子どもたちは遊びの天才であり、遊びたい欲求には強いものがある。その遊びのプログラムを各施設のスタッフが周到に準備した。

例えば、体育施設なら体操、カヌー、ミニバスケットなどのスポーツ。文化施設なら神楽、和太鼓、琴、ミュージカルなどで、地域の伝統文化を盛り込んだ。「楽しく」「面白く」「安全に」を基本理念にプログラムを計画した。

プログラムによっては参加者数にばらつきはあったが、子どもたちに魅力のあるさまざまなメニューが用意されていた。

雲南市内の児童を対象にしたアンケート（回答者 1,009 人）で、参加動機について「内容が楽しそうだから」が一番多かったこともそのことを裏付けている。

昨年１０月には、市内の集客施設で芋掘りや巨大迷路で遊ぶ自然体験のプログラムがあり、７２人の親子が参加した。楽しいプログラムは当然、参加者も多く、施設と違って自然の中で遊ぶ子ども本来の遊び方ができるプログラムを時に盛り込んだ。

児童へのアンケートで、「休日には家で遊ぶ」と答えた子どもたちが８割近く、また「ゲームをして遊ぶ」が３割を占めている現状では、まず「外へ連れ出す」「外で遊ぶ」ことへの導き役を果たすことができたといえるのではないか。

しかし、アンケート結果をみると課題もある。

不参加の理由について、「会場が遠く、一人で行けない」と答えた児童が１割いた。新たな参加者を増やすためにも、会場数を増やし地域を広げて参加しやすくする努力が求められる。

また、アンケートに答えた２２５人の教員の中で、プログラムについて「知らない」教員が１割以上あった。

この事業をより「活発化させるには」、多くの教員が保護者の理解、協力とともにスタッフ、ボランティアの協力が必要と答えている。

この点は、今年２月に雲南市で開かれた「総合的な放課後子どもプラン推進シンポジウム」の中でも、（平日放課後子ども教室の課題ではあるが）スタッフの確保が挙げられた。

事業の広がりには、各施設スタッフだけでなく地域、学校、教員、行政への理解を深めるとともに、連携を密にした、実際に動くことのできる実行委組織の充実が欠かせない。

調査研究事業なのでさまざまな課題があって当然だが、実質８か月の期間内で雲南市内の全児童数（2,293 人）の２倍にあたる４，４００人余の児童ら（未就学児、中学生、その他を含む）が、何らかのプログラムに参加したことは、この事業の魅力や必要性を物語っていると言えるのではないかと思う。

（ジャーナリスト）

文化体育施設利用の放課後子ども教室活動からみえてきたこと

佐々木　弾正

子どもを取巻く急速な環境変化の中で、特に家庭や地域の子育て機能と教育力の低下が問題視される一方、放課後の子どもたちが安全で安心して過ごせる活動場所の確保を図ることが緊急の課題とされ、この対策の一つとして地域教育力の再生を求める声が高まってきた。

これを踏まえて、16 年度に文部科学省を中心に「地域子どもプラン」が打出され、「子ども居場所づくり事業」がスタートする。その効果が評価されて、１９年度から文部科学省と厚生労働省の連携の下で、地方公共団体が事業主体となって総合的な放課後子ども対策で「放課後子どもプラン推進事業」に拡大され、全国展開が図られた。

確かに社会総がかりで子どもたちの育ちを支える気運の醸成と仕組みづくりができ、何よりも多くの子どもたちが参加し、たくさんの地域の方に関わっていただくこととなった。その点では子どもと家庭・地域が変わったという評価も聞かれる。

しかし一方では、目まぐるしく変わる制度についていけない地域も多くその伸びは鈍く、放課後子ども教室は難航している点も指摘されている。

その原因の一つに、これまでの取組みで多くの課題が出てきたことが挙げられている。

一般的にいわれている点では、「教室の仕組み、体制上の問題点」として

（１）ボランティアスタッフの確保

（２）保護者の多様な期待、理解

（３）運営経費の捻出、確保

また「教室の運営上の問題点」として

（１）活動プログラムに何を取上げるか（魅力ある内容など）

（２）どこまで子どもたちに関わっていけばいいのか（親の子育て放棄など）

（３）学校教育特に教員の共通理解、協力連携が取れているのかといった基本的な問題がきちっと確認されていない面があるとされている。

現実に今でも「放課後教室は何のためにやるの」とか「一部の希望者だけが参加するものでしょう」といった声は聞かれる。4 年目に入ってもうそろそろ保護者と地域の教室関係者の間で、明確な目的の共有化が確立されてもいい時期に来ている。

もちろん学校にもいえることです。ややもすると学校側の理解、協力が薄いとの指摘もある。「放課後は、家庭を含めた地域社会の役割である。」と思い込んでいる教職員もいると聞く。ここ雲南でも「次から次に制度が変わり迷惑している」とか「一部の人の考えで動かされている」といった声もある。

しかし、地域の教育力の再生としての教育支援のねらいには、少しでも学校に「ゆとり」を作ってあげ、学校教育に期待したい児童生徒の学力の向上へ専念して欲しいとの願い

があることを忘れてもらっては困る。
要は、学校・家庭・地域社会が目的を共有し、連携協力によって子どもたちの良好な教育環境を再構築していかねばならないことを確認することが最重要ではないでしょうか。

先に開催された「総合的な放課後子どもプラン推進シンポジュウム」では、積極的な新しい取組みに対し、多くの課題がストレートに発言されていた。いずれも貴重な問題点として具体的に抽出され、感心したと同時に参考になった。
中でも、雲南市の教育基本目標とされる「ふるさとを愛し、心豊かでたくましく未来を切り拓く人づくり」に、この放課後子ども教室がどう関わっていくべきか。その役割分担をどう果たしていくのか。またどう連携を強めていくのかという大きな課題には、今後十分時間をかけて取組んでほしいと期待をするものです。
また、広い地域に満遍なく魅力あるプログラムを提供していくことは大変な叡智が試されるが、是非期待に応えてください。
この子ども教室の開設によって、子どもたちの行動エリアが一挙に広くなり、従来の校区内の活動から市全域に広がってきたことは子どもたちの旺盛な探究心を高めると同時に、ふるさとの再発見への好機になる。何よりも「雲南のブランド化プロジェクト」に子どもたちを巻き込むチャンスができ、期待できる。これこそ真のふるさと体験活動である。
次に意見として指摘された周知広報活動が不足していた点ですが、制度がスタートして間がない点は分かるが、地域に合った有効なＰＲ戦術を考え、学校と地域の理解を注いでいくことが肝要ではないでしょうか。放課後子ども教室は、誰のものでもなく、地域全体の共有物であるはずです。みんなで育てていこうという雰囲気づくりが大切です。
そして何よりも、来年度以降に継続して教室開設をすることが最も大きい課題であり、実践することが求められる。そのために一人ひとりのやるべき仕事、任務があるはずです。もちろん国、県そして市当局の理解と協力も欠かせません。
いつの世にあっても、子どもに夢のある社会を築き、残していくことは大人としての大事な責務であります。社会総がかりで子どもの育ちを支えようとの気運の醸成が見えてきた今こそ、みんなの力を教育力の再生に結集しようではありませんか。

（社会教育アドバイザー）

「遊学」の復権に期待

吉岡　登

核家族が主流で兄弟が少なく、遊びにおいても、テレビやゲーム等で一人で遊ぶことの多い現在の子どもたちは、多様な人間関係の中でそのバランスをとることを学ぶ機会が極めて少なく、人間関係を苦手としています。また、物質的には飽和状態のような中での情報機器を使っての遊びは、単に刺激を求めるばかりで、創意工夫をして作り上げるという創造的な遊びではなくなっています。

それに対して昔は、多くの異年齢の子どもたちが一緒になって遊び、創意工夫して、感動的な体験を積んでいました。遊びを通して人間関係が自然に鍛錬され、感性も磨かれ、各自の個性が引き出されていたように思います。

従って、現在の子どもの、人間関係の苦手意識や創造性の貧弱さといった共通の弱点の背景には、「よき遊び」が失われたことがあるように思います。

このような状況の中で、現在の子どもたちに必要な人間関係の鍛錬と創造性の啓発の場として、スポーツや文化芸術活動の機会を積極的に与えておられる雲南市の試みは、まさに時宜を得たものであると思います。しかも、行政機関と教育機関が綿密な連携を図り、積極的で効果的に取り組んでおられることに敬意を表します。

また、この事業を企画運営されるのが「遊学」であり、昔の「よき遊び」を現代に再現する取り組みであるようにも思え、その着眼点の鋭さには驚きました。さらに、今後への期待を持っています。

現在の日本は、人類歴史の中でも最も豊かな物質文明を形成しましたが、その反面、親が子どもを殺したり、子どもが親を殺すという、最も子育てに失敗した社会となっています。豊かな社会での子育ては、日本の歴史上未経験であり、物質的に豊かになればなるほど精神が悪化していく現代の様相の中で、多くの親たちが子育てに不安を抱えています。しかも、各家庭がそれぞれ単独でこの問題に取り組むことは、現実的に困難であり、学校と地域からの救いの手が必要です。

従って、この雲南市の取り組みが、失った家庭や地域の教育力をフォローし、現在の子どもたちの弱点を補うことができれば、日本の教育の方向性に大きなインパクトを与えるものになるのではないかと思います。

子どもには、異年齢の集団による体験を通しての遊びが必要であり、この「よき遊び」を通して人格の土台が形成されるということを広く社会に示していただきたいと思います。学力や能力を磨くこと以上に、意欲を持って創造性を発揮し、人間関係を形成して、和をもって共生することこそ、人生の中心的なテーマであることを再認識すべき時にきています。

遊学の意義と価値が再認識されるところに、家庭や地域の教育力の再生があるものと思います。

（家庭教育アドバイザー）

学社連携に向けた大いなる期待

藤原　克朗

平成１９年度から文部科学省と厚生労働省が連携して、地方公共団体が事業主体となって、総合的な放課後対策として「放課後子ども推進事業」がスタートした。

文部科学省は、その『放課後子どもプラン』の充実を図るために必要な調査研究を行いその成果を示すことで、子どもたちが地域社会のなかで、心豊かに健やかに育っていく環境づくり事業を推進しようとしている。

雲南市は、全国に先駆けて、この調査研究の指定を受け「市内文化体育施設利用・放課後子ども教室」事業を行ってきた。

この事業の事例を検証し、今後の活動の展開に資するために、雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会が、このシンポジュウムを開いた。

最初に、文部科学省の安間敏雄スポーツ・青少年局青少年課長の基調講演があり、先の教育基本法の改正に始まる今後の国の対策について、５年間実施してきた学校５日制、ゆとり教育からの転換、学力の減退、体力の低下、都会での青少年の実態、食事が学校給食だけで終えている子どもの増加、横の繋がりに終始する学校社会の実情ｅｔｃ・・・・に絡んで、地域子ども教室、放課後子ども教室事業への取組自治体の減少傾向、地域社会での青少年への支援体制の不備・未成熟・・・こうした実態のなかにあって雲南市がこの調査研究事業によって全国のトップランナー（Ｔｏｐ　Ｒｕｎｎｅｒ）として、この取組の成果が物凄く期待されていることを痛感した。

学校５日制危機・学校中心主義の再来（逆戻り？）・・授業時数と大学入試・地域文化の継承・振興・多様な場の活用など多くの課題の中にあって「学社連携に向けた雲南市への期待に応えたい。」そんな気持ちにさせられた。

そして、二つの事例の発表

１．「六つの文化体育施設を利用・活用した取組」

「土・日・休日の放課後子ども教室の取り組みについて」

実施の状況と、七つの『今後の大きな課題』そして四つの『その他の課題』を中心にした発表であった。これらのどの一つを取り上げても簡単に解決できる課題ではない。これまでの半年余りでの取組は、課題みつけの期間であったかもしれない。これらの課題は事業実施を進める中でどう取組み解決へ向けた努力をするのか・・・関係する者だれもが自分の立場、持ち場で知恵を出し合い、汗を流して活動するしかない。

２．「平日放課後子ども教室との連携」については、教育支援コーディネーターによる

発表であった

１．スタッフの確保
２．保護者との連携（保護者の組織化）
３．さまざまな子ども達へのかかわり
４．大人のかかわりについて（大人の研修会の持ち方）
５．放課後児童クラブとの連携・共存

これらの五つの視点から多くの問題・課題の提供であり、発表であった。

この二つの発表は、現実を直視した即解決・解消したい課題であった。
今後の取組に期待するしかないが、ステップバイステップ（ＳＴＥＰ　ＢＹ　ＳＴＥＰ）一つの課題を確実に解決・解消する姿勢が必要だと強く思っている。

こうした放課後の発展的な素晴らしい居場所・活動の場を設置した時、自ら或いは保護者の勧めで参加できる子ども以外で、**参加できていない子へのアプローチ**をどうするかが**更に大きな課題**であるように考える。

（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員・市文化団体代表）

子どもの育ちを地域で支えるということ
～今後の放課後子どもプランについて～

後藤　康太郎

◆　何をするのかという内容の課題

放課後子どもプランとしての１年が経過し、また「放課後子ども教室」と改称された子どもの居場所づくりは４年目を迎えました。

子どもの放課後や休日の居場所づくりは、そこに子どもや保護者が来たいと欲する何かの魅力がなくてはならないでしょう。今の子どもたちの放課後や休日は昔と大きく変わりました。良い悪いは別として地域によっては習い事やスポーツ活動の機会が多く用意されていますし、家に帰れば刺激的なゲームもあるしテレビもあります。

ゲームやテレビに負けない魅力ある場所。それがなければ子どもの居場所は「子どもの居させられ場所」でしかなくなってしまうように思うのです。

その魅力が何か、居場所にいる大人なのか、たくさんの友達なのか、具体的な遊びの中身なのか、強制されない自由（あるいはその逆）なのか、そここそ地域ごとで地域の特性を生かしたものを見いだしていく必要があります。ゲームやテレビやまんがに負けない魅力ある場をいかにして創っていくのか、地域力が問われるところです。

◆　子どもの育ちを支える質の課題

子どもが来たいと感じる場をつくり、そこで子どもの育ちを支えるためには、そこにかかわる大人の力量を高めていくこともとても大切です。補助事業である放課後子ども教室と放課後児童クラブ双方で県内には約３００の放課後の活動の場が開設されていますが、子ども達の環境や関わる大人は千差万別です。子ども教室は高齢の方や地域の子育て支援に関わってきた皆さんが多く参画し、また放課後児童クラブはそのような皆さんに加え子ども達に年齢の近い若い指導員の皆さんも多く関わっています。そして何より活動に関する思いや考え、また取り組む中身もまったく様々です。

多様な人格にふれるという点においてむしろ大変いいことですし、それを私たちも進めてきました。しかし前述の様な状況も踏まえ、子どもの育ちに関わる場ですから、皆さんが知っておくべきことや考えていただきたいことは、やはり有るのだろうと感じています。遊びを通して子どもの育ちをどう支えるか、安全対策・危機管理をいかに行うか、障害のある子どもへの支援をどうするか等々、目の前の子どもを改めて見つめ、前述のような単なる「居させられ場所」でなく、関わる皆さんの思いを併せ、子どもの育ちを支えるための質を高めていくことを今後より進めて行くべきだと考えています。そのためにも、自治体等が主催する研修や交流の場を活用していくことも考えていただきたいと思っています。

◆　社会全体で担うという課題

「放課後子どもプラン」は地域の宝である子どもを地域全体で育むことを基本理念として、地域での子どもの育ちを支えようとするものです。しかし依然としてそれを支えていただいているのは地域の子育てに熱心な皆さんが中心となり展開され、めざしてきたような地域社会全体で取り組みを支える状況には至っていないのが現実です。

関わる皆さんからよくお聞きするのは保護者の皆さんとの関わりや、学校関係者との連携を求める声、あるいは地域のその他の関係機関（老人クラブや民生委員など）との連携を求める声などです。

希に運営の主体を保護者が担っている居場所も有りますが、仕事を抱えている方には難しい面も多いでしょう。保護者の皆さんができるだけ多く地域の取り組みに関わっていく仕組みをつくることや、そのようなふれあいの中で多様な「子育て観」に触れる機会を意図的に仕組んでいく必要がありそうです。

学校も学校教育を離れた場での子どもの様子を見ることは教育活動にとって重要であろうし、なにより学校が地域のニーズや活動の内容に関心を持つことは今まさに求められていることに他なりません。

さらに地域全体で担うためにも、より広く、とりわけこれまで関わることの少なかった企業等、保護者をはじめ地域の人材の就労の場へこれらの理念をとどける工夫も必要だと考えています。企業ボランティアなども徐々に進みつつあり、地域の中で企業が担う役割も変化しつつある今、働きかけへの知恵が求められます。

◆　地域で想いをかよわせる（検討の）場を

家庭の中で育つ子どもは、家族の「この子にこんなふうに育ってほしい」という共通の思いの中で育つことでしょう。学校教育の場でも親の思い、学校の思いの共有化の中で子どもの育ちを支えることの大切さは今さら語るまでもありません。

さて、子どもは家庭や学校ばかりで育つわけではなく、地域社会の中でも様々な育ちの機会を持っています。そしてこれまでその育ちを支えるために様々な取り組みが、とりわけ島根の場合は地域の力で多くなされてきました。

以前の地域社会は子どもの育ちについて概ねの共通認識があったはずですが、価値観が多様化した現代では難しいことです。前述の地域の取り組みも多くはそれぞれの理念で展開され、地域で意見を交わらせる場が有ることは希です。

そこでこの子どもプランを契機に進めるべきと考えるのは、家庭や学校を包含した地域社会全体で、「子どもの育ち」の想いの共有化を行っていくこと、あるいはそんな場をつくっていくことだと考えています。地域で地域の子どもをどう育てるかということをそこに関わる大人が（できれば子どもも交えて）みんなで検討し、地域ごとの姿を共有化させていくことが放課後や休日の総合的な子どもの育ちを支える取り組みにつながるのではないでしょうか。

先に述べたような様々な課題の答えは、おそらく「子どもの育ち」というキーワードで交わされる想いの共有化の中に有るように思っていますし、検討の場の中から、その地域ならではの推進に向けた知恵が生まれるはずです。「子どもは地域の宝」。子どもの健やかな育ちはすべての大人の願いです。子どもは地域に元気や希望や安らぎを与えてくれ、そしてそんな子どものためならと汗をかく大人も地域の中にまだまだたくさんいます。そんな力を結集し、より多くの地域でこの社会総がかりの取り組み「放課後子どもプラン」を推進し、島根の子どもたちの放課後や休日をより心安らぐ豊かなものにしていこうではありませんか。

（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員・社会教育主事）

放 課 後 子 ど も 教 室 の 実 践

安食 厚

◆ 公民館を子どもの居場所に

公民館の活動は、地域内の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もって住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することが目的となっています。そして、公民館の事業は、社会教育の上から住民のニーズに応え幅広い事業が行われます。

地域の課題は、産業振興、福祉の振興、教育文化活動などの面から見極めなければなりませんが、過疎の町となっていく波多地域では、今育ち行く子どもを大切にすることを考えると、公民館は地域の教育力が育って行くことに培う事業を大切にしなければならないと考えています。

波多小学校では放課後、自分で家に帰って行く児童と保護者の都合で学校に居残りをしている児童がいることを知りました。保護者が迎えに来るまでは、放課後になっても、先生方は居残りの児童を保護者が迎えに来るまで学校で管理されていたのであります。この現状を地域で受け止め、地域で子どもの居場所を設けて、学校に頼ることを止めることにして、公民館を子どもの居場所としました。放課後、児童は公民館にやって来ることにしました。公民館で宿題をしたり、自由遊びをしたりし保護者の迎えを待つことにしました。こうした公民館での子どもの居場所をスタートするにあたっては、小学校との連携と一方では地域への働きかけで見守りスタッフを募ったりして波多地域での放課後子どもの居場所を立ち上げました。毎週火曜日から金曜日まで、午後３時半ごろより５時半ぐらいまでの見守りをはじめました。

◆ 放課後子どもプラン推進事業へ

平成１９年度より文部科学省と厚生労働省が連携の下、地方公共団体が事業主体となって総合的な放課後対策として「放課後子どもプラン推進事業」が始まり展開されています。この事業は、地域の宝である子どもを地域全体で育むという基本理念に基づき、群れて遊ぶことが少なくゲームやテレビですごしがちな子どもに、地域の大人たちの力を結集し、放課後や休日を健やかに過ごすことができる環境を保障し、地域での子どもの育ちを支えようとするのがねらいであります。

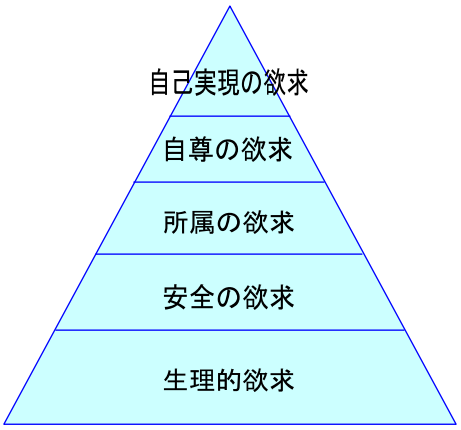
特に、雲南市では「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会」で、この推進事業が進められています。そして、その成果を見つめる研修会も開催されています。具体的な活動内容、場所、期日は、毎月発行されている広報紙「わくわくプログラム」で案内されています。この事業の趣旨を生かした活動の場は、できるだけ多く設けて沢山の子どもに参加を呼びかけることも考えられています。

◆ 子どもの居場所実践で

これまで「地域の子どもは地域で育てる」「地域の教育力を育む」と言われ、地域の青少年健全育成の会などでいろいろな活動が行われてきていますが、「子どもの居場所づくり」の実践で地域での子育ち、地域の教育力に培う活動は多くなっていると思われます。さらに「放課後子どもプラン推進事業」が雲南市で進められていることは、子どもの居場所実践に多くのヒントを与えています。こうして進められている子どもの居場所では、次の事を大切にして来ました。

子ども一人ひとりの**自己実現の欲求**を満たすことへの手立てを考えて、子どもとの関りの中でしっかりと子どもを受け止めること大切にして来ました。自己実現の欲求を 5 段階に考えて（アメリカの教育学者マスローの説）所属の欲求、自尊の欲求を満たすことへの関わりを大切にしました。

みんなの中にいて、一緒に行動していることの確かめが出来るように、例えば居場所で折り紙をしたときは、必ずみんなの作品を部屋に展示します。またお絵かきでは、どんな絵でも捨てないで子どもよりもらい、それも部屋に展示します。こうして自分がやっていることがみんなと一緒で行動出来ていることを感知するような環境づくりに努めました。また得意になってやっていることには、称賛をすることを心がけました。今、公民館の居場所活動の部屋には、折り紙のくす玉やモビールがつるしてあります。掲示ではお絵かきで画いた女の子、怪獣の絵がぎっしり貼ってあります。紙飛行機で工夫して作ったのは、箱の中にためています。また、公民館の子ども活動を記録した写真や小学校で子どもが活動している写真を、子ども活動をしている場に、子どもたちが見てくれるように掲示しています。こうして一人ひとりの子どもの自己実現の欲求を満たすことへの関わりを大切にしています。



マスローの自己実現欲求
〔ヒエラルキー〕

また、**子どもの人格形成**には、多くの人々との出会いが大切であります。雲南市で始まっている文化体育施設利用放課後子ども教室のわくわくプログラムでは、沢山の人との出会いの中で活動が出来るチャンスがあります。親子での参加で多くの人との出会い、遠いところからの参加者との出会いで人間関係の広がり、そして指導者を得て活動していく中で成就感を持つことも出来ると言うことなど人格形成に欠かせない体験が沢山

できるのであります。このように考えて子どもの居場所の大切さが理解され立派な運営がされなければなりません。

◆　子どもや保護者との関わりを大切に

島根の放課後子どもプランについて説明されているリーフレット（島根県・島根県教育委員会発行）の冒頭に「子どもは地域の宝です」と書かれています。宝としている子どもの良いところは誇りをもって語り、みんながそのことを共有して行くことだと思います。子どもの居場所で子どもと共に活動しているスタッフと子どもの親さんとの語りの中で、また、子どもを取り巻いている社会のいろいろな人の集いの中で子どもを語ることを大切にしたいのであります。放課後子どもの居場所で、公民館に来た子どもを迎えに来られた保護者には、その日の様子や感じたことを親さんに伝えるようにしています。特に子どもの変容についてはこまめに気づいた事を話すようにしています。

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会では「総合的な放課後子どもプラン」推進シンポジュウムが開催され、わくわくプログラムの活動に参加している子どもが語られました。また、その場では文化体育施設利用での子ども教室の成果の発表もありましたが、会場の参加者で、放課後子どもの居場所スタッフの方から、自分たちは直接子どもを見守っており貴重な体験をしている。その体験が話せる場を作って欲しいと発言されていました。これから、この地域子ども教室推進事業が積極的に進められて行く中で、子どもや保護者に直接、また間接に関わっている者が語り合って行くことは、大切にされなければならないと考えます。

（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員・市公民館長会代表）

「地　域　の思　いはひとつ」

坂本 暢子

火曜日、金曜日の午後３時になると、子どもたちは大きな声で
「こんにちはー!」
学校からメインセンターへ先を急いでニコニコしながらやってきます。当番のスタッフ４～５名が名札と笛を首に下げ、子どもたちを迎えます。

先日は、「びゅんびゅんごま」を作りました。紙を切って、穴をあけ、色を塗り、タコ糸をとおして出来上がりです。それからが大変。コツがつかめずなかなか勢い良く回りません。名人のおじさんにコツを教わりながら練習です。我慢できずにすぐ諦めて別の遊びをする子。辛抱強く挑戦する子。すでに自分の子育てを終了したスタッフが、孫のような年齢の子どもたちと付き合いながら、一生懸命です。

バトミントンや縄跳び、バレーボールなどの相手はかなり大変ですが、一緒に体を動かしヘトヘトになり２時間が終わるとほっとします。反省では、昔の子育てでは経験しなかったような出来事や、友達関係など「どげしたらいいだーかね？」と意見交換し、昔も今も変わらぬ普遍的なことは自信を持って助言し、日々勉強させていただいております。

昨年度から画期的な試みとして、週末や休日に文化体育施設利用の放課後子ども教室が開設されました。これは地域を越えて、幅広い分野の遊びや趣味の世界に接することができ、子どもたちの感性を高めることができるすばらしい事業であると思います。親が子どもにこれだけの内容を体験させるのは並大抵の努力では実現できません。それを思うと何とありがたいことでしょう。これを活かし子どもたちのために役立てるかどうかは、保護者の考え次第です。大いにこの事業に参加して欲しいと願っています。

「昔の子どもたちはどこの家庭でも大体同じような生活体験をして、幼稚園、小学校に入学していたが、最近は想像もつかないほど様々な成長過程をとおっているので常識だと思っていたことが全く違い、戸惑うことがある」と先生から聞いたことがあります「みんな違ってみんないい！」個性を伸ばすことは大切なことですが、これは基本的なことが身についた後に伸ばすべきものであると思います。家々によって異なる躾や習慣を身につけた子どもたちが、集団のなかで違和感無く過ごされようにするためには、いろんな人の影響を受けることが大切です。子育ては家庭だけでなく、学校の先生、地域の大人の協力の中で、出来る限り多くの大人と関わりを持ちながら成長することが望ましいのではないでしょうか。

「将来を託す地域の大切な宝である子どもたち」。重大な使命を持つ事業に参加させていただくことに感謝し、今後ともスタッフとして努力したいと思います。

（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員・
市子ども居場所づくり実行委員代表）

放 課 後 子 ど も 教 室 に 思 う ！

小林　和彦

１．はじめに

近年の子どもたちをとりまく環境の変化には、驚くものがあります。直接には、ゲームやネットなどの急激なＩＴ環境の変化と朝食に見られる食の課題などから生活リズムの乱れも生じています。また、周囲では、核家族化による家族のふれ合いや地域との係わりの希薄化など子どもの成長に大きく左右する課題が山積しています。

この雲南市においても、少子高齢化の波が押し寄せ、地域で遊ぶ子どもの姿を見かけることが少なくなりました。また、子どもたちは、休日や放課後に学年を超えた仲間や地域と触れ合う場や時間が失われてきました。地域の大人たちも、そんな子どもたちの状況に課題を持ちながらも対応できない状況でした。

そんな状況の中、平成１７年度「雲南市子どもの居場所事業」が始まりました。私は、雲南市の学校教育に係わりながら、「子どもの居場所」に引き続き１９年度より実施された「放課後子ども教室」「文化体育施設利用放課後子ども教室」との出会いについて思いを述べさせて頂きます。

２．事業の経緯に係わって

１７年度にスタートした「子どもの居場所事業」は、地域の教育力の再生をめざして市内全ての小・中学校下において実施されましたが、私の前任校である「寺領小学校」では、地域と連携した組織を立ち上げ、地域ボランティアの支援を得ながら子どもの遊びを中心とした活動を見守っていく取り組みとして理解し、公民館の全面的な協力を得てスタートすることができました。地域の大人たちは、子どもの実情に触れるとき、大きな責任を感じ自分たちの力でなんとかできるものなら頑張りたいという積極的な強い気持ちを持っていました。地域ボランティアも多数の方に協力をして頂き、公民館を会場にして熱心な活動を展開することができ、現在も発展的に実施されています。

また、現任校では週三回の「大東子ども広場」に９０名もの児童が登録し、放課後の活動を楽しみにしています。しかし、学校の空き教室を利用しているため十分な活動スペースがとれず、活動内容の制約があることと、ボランティアスタッフの人数が不足気味で、安心した見守り活動ができにくいという課題もあります。

平成１９年度から「子どもの居場所事業」が「放課後子ども教室事業」へと推移し、若干の環境は変わりましたが、「大東子ども広場」活動は、ほとんど内容を変えず活動を継続しています。

同時にスタートした土・日対応の「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室事業」には、実行委員会と教室スタッフとして参画してきました。毎月発行される「うんなん元気っ子、わくわくプログラム」には、特に関心を持っていますが、市内６箇所の文化体育施設では、施設の特性を生かした多様な内容の教室が開催されています。

放課後の子どもたちの生活には、都市部も地方も同じ課題が存在しています。地方では、交通機関の不便さから家庭に帰ると遊びにいくにも家族の送り迎えを必要とする環境があり、家庭におけるゲームやテレビ漬けの時間も都市部と変わらない現状で、むしろ深刻といえます。この事業によって、「学校」から「子ども教室」への移動で、多くの仲間や地域の大人たちとかかわることができることは、子どもの生活を一変させる効果があります。

また、もっと期待できることは、地域の大人たちも（高齢者が多いのですが）少子高齢化社会の中で、地域の子どもたちと係わることで新鮮な出会いと生き甲斐を感じていると話されていることです。元気な高齢者は、先人の知恵を子どもに伝え、伝えることでますます元気になっていく姿があります。この元気な輪が、高齢者から若い大人や保護者に伝わっていくことが期待できます。そして、地域全体が子どもを通して、活力ある地域へと変貌していくのではないでしょうか。

３．　雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室のスタッフとして

１９年度スタートの本事業は、放課後子ども教室事業の一環として学校の「休日・休業日」の子どもたちの居場所を支援する事業です。学校では提供できにくい多様な活動を文化体育施設の特性をいかして提供し、子どもたちが生き生きと活動する姿が随所で見られるようになりました。

毎月発行される「わくわくプログラム」には、各施設の特性に応じて多くの指導スタッフにより多様な活動が展開されています。

私も９月から、木次の文化施設「チェリヴァホール」において、「ミラクルマジック教室」を開催させて頂いています。趣味でマジックを習い、高齢者施設や幼稚園、保育園等で披露していますが、教室で児童に教えることは初めてのことでした。

当初は、５～６名の参加があれば十分と考えて、気楽に引き受けていましたが、次第に参加人数が増加し、１１月の教室では、２０名もの参加がありました。とても人気のある教室と聞いています。教室の内容としては、私のマジックを子どもたちに見せながら、自分たちもマジックをやってみたい気持ちを持たせ、手作りのマジックに挑戦しています。

土・日参加の子どもたちは、３年生以下の低学年の子どもたちが多く、高学年の子どもたちは、スポーツ少年団活動等の参加で時間の確保ができない状況のようです。また、当初は、木次地区の子どもが中心でしたが、次第に口コミで、加茂・大東・三刀屋と参加する子どもの地域が広がってきました。参加人数の多い時には、参観の保護者の方に手伝ってもらうこともありました。毎回、初めて参加する子どもがいることは、教室の内容がこれまで練習してきたマッジクを積み上げながら、次のステップにいくことを基本としていたため対応に苦慮しましたが、楽しみに参加している子どもの姿をみるとそうもいきません。

手作りマジックといっても低学年に簡単にできるものは少なく、毎回頭を悩ませていますが、参加する子どもたちも次第に定着してきたため、前回の復習や新しいマジックへの挑戦と二時間の時間が足りないくらいになってきました。また、雲南市内の各地か

ら参加する子どもたちには、マジック教室の活動の中から互いに会話を楽しみ、触れ合う姿が見られるようになってきました。

月に一回のマジック教室ですが、私の願いとしてマジック大好きな子どもになって欲しいことはもちろんですが、人前でマジックを披露することで意欲的に挑戦する子ども、マジックを通して多くの友だちを作る子どもになって欲しいと願っています。将来は、教室の子どもたちと、市内の高齢者施設を訪問し披露できたらとの願いも持っています。

4. 成果と課題について

平成１４年度から始まった完全学校週五日制から６年がたちました。当初は土曜日曜には、子どもたちを家庭や地域に返し対応することで、家庭や地域の教育力を高めることがねらいとなっていました。しかし、６年を過ぎた今、一向に子どもたちの休日の過ごし方には、変化がありません。むしろメディアの普及等の要因により生活リズムの乱れには憂慮するものがあります。この「土日対応の雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室」は、そんな子どもたちの現状を踏まえるとき画期的な取り組みといえます。多様なニーズを持つ市内の子どもたちに魅力あるプログラムを提供し、その中で生き生きと活動する子どもの姿には、「感育」「歩育」「健育」「徳育」の４つの「育」を育てるという本事業の目的を感じることができます。

一方、課題も感じています。プログラムによっては、幅広い学年の参加もありますが、多くの教室において参加する子どもたちが低学年に限定されているように思います。どの学年も参加するには、スポーツ少年団の指導者や保護者への理解を得ることも必要ではないでしょうか。

また、参加する子どもの地域が限定されることも課題ではないでしょうか。６つの文化体育施設は、中心部にあり周辺地域の子どもたちは参加しにくい状況にあります。保護者の送り迎えで参加している子どもが多く、距離的にも周辺部からの参加は難しくなります。状況を改善するためには、効果的な市民バスの利用や出前教室等検討されているので、今後に期待しています。

5. おわりに

「子どもの居場所」から「放課後子ども教室」へと三年が過ぎました。雲南市においては、県内はもとより全国的にも先進的な実践地域として注目されています。しかし、この事業の認知度はまだまだ低いと思っています。

一人でも多くの大人が、この事業に参画し活力のある地域を作り上げるチャンスではないでしょうか。また、何より大切なことは、子どもを持つ保護者と学校の係わりが十分ではありません。保護者が、自分の子どもの教育に地域の係わりが大切であることを認識し、学校と関係機関と連携できるよう意識改革を進めることが必要と思っています。

（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員）

文化体育施設を利用した子ども教室の取り組みについて

石橋 雄一

平成１９年８月から始まった雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室は、市内の文化体育施設を有効活用し、子どもたちに学校や地域では十分に体験できない活動の場を確保するという意味からも、大変意義深いものがありました。

この事業の全体像がはっきりしたのが昨年の夏休み直前であり、関係者の皆様のご努力にもかかわらず、残念ながら子ども教室の主旨や内容、方法等が子どもや保護者に十分浸透する時間的な余裕がなかったように思います。しかし、半年あまりを経過した現在においては、次第にその活動内容等も子どもや保護者に理解され、参加者も増えてきているように思います。

また、毎月出される「わくわくプログラム」のパンフレットには、市内６カ所の施設でたくさんのプログラムが計画され、関係者の皆様の努力と意欲が感じられるものでした。パンフレットの最後のページには１ヶ月分の活動がカレンダー形式で載せてあり、子どもや保護者にも「いつ、どこで、何が」行われるのか、分かりやすいように工夫がされていてよかったと思います。

平成２０年度は、いよいよ２年目に入ります。今後より一層充実した子ども教室とするために、私なりに感じていることをあげてみたいと思います。

子ども達がどんな活動をしたいのか、子どものニーズにあったプログラムの作成が２年目としての課題になってくると思います。たくさんの子どもを集めること自体が目的ではないと思いますので、参加した子どもが楽しく喜んで活動し、満足感の持てるようなプログラムを計画することが必要だと思います。そのためには、今年度のプログラムを検討し、精選する必要がでてくることもあるかもしれません。また、指導者の確保という問題はありますが、参加した子どもへのニーズ調査等をすることも考えられます。

今年度、市内の子どもや保護者全員を対象に２回のアンケート調査が行われましたが、他のアンケート等も年間たくさんあり、特に年度末の調査は時期的に保護者も調査が集中し大変だったと思います。２０年度はアンケートの回数についてもご一考ください。

また、各小学校区で行われていないもの、実施が難しいもの等を一層優先してプログラム化することも必要だと思います。地域のスポーツ少年団や行事等と内容が重複しないようにすれば、少しでも参加者が増えるのではないでしょうか。

既に行われているとは思いますが、ケーブルテレビ等を活用した広報活動を一層充実することも有効だと思います。活字では伝えることが難しい部分を、映像を通して見てもらえれば楽しさが伝わりやすいのではないでしょうか。

面積が広い雲南市内の６カ所の施設を利用してプログラムが計画されていますので、

交通手段の確保が大きな課題であると思います。子どもが参加したくても親の送り迎えが出来ない家庭、路線バスの時間とプログラムの実施時間がうまく合わない地域等がどうしても出てくると思います。６施設に近い所に住んでいる子どもは参加しやすいですが、施設から遠く離れた所に住んでいる子どもは、休日に親が時間をとって連れて行くことが難しい場合もあるように思います。予算の都合がつけば、マイクロバスを準備することができれば一番いいのですが。

また、６施設での開催が原則だとは思いますが、時には山間地の施設を使った出前のプログラムも年間いくつか考えてもらえると、施設から遠く離れた所に住む子どもたちも参加がしやすくなるように思います。

毎月のそれぞれのプログラムに参加者の対象年齢を記入してあると、子どもも参加しやすいように思います。例えば、バスケット教室といっても低学年と高学年では試合もできません。参加者がたくさんいれば年齢別に分けて活動をすることも可能ですが、参加者が少ない場合は年齢が違いすぎると活動が難しくなり、子ども一人一人の満足感も少なくなると思います。

長期休業中の子ども教室の開催は、学期中よりも子どもたちも参加がしやすくなると思います。１年目の実績をもとに、長期休業中限定のプログラムの充実を期待します。

４月からは、いよいよ平成２０年度に入ります。

雲南市の文化体育施設を利用した子ども教室が益々充実・発展し、市内の子どもたちが安心・安全な環境の中で楽しく体験活動をすることを通して、友達を増やし自分の心と体を一層磨く場となることを願っています。

（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員）

子どものために何ができるのか！

加藤 雄二

◆ 子どもたちのために何ができるのか「きょろパス」

地域にある「ヒト、モノ、コト」の教育資源をどう活かすかという使命をになう、教育支援コーディネーターが発案した事業に「きょろパス」という制度があります。これは夏休みの間、小中学生が市民バスを３００円で乗り放題にできる制度のことで、パスポートの正式名称は「ふるさと雲南キョロキョロ探検パスポート」と言います。子ども達が夏休みを活動的に過ごして「ふるさと」に愛着を感じてほしいという気持ちを込めて制度化しました。

しかし、初めて実施した昨年の発行数は約１６０枚と期待したほど多くありませんでした。アンケートを見ると「親も市民バスに乗ったことがないので、子どもだけで乗せるのは不安」、「どこに行っていいか分からない」、「行きたい所がない」などの意見が寄せられており、市民バスに乗る不安や乗車することに対しての動機が持てないということが分かりました。今年度の課題は、子ども達が参加したくなるメニューをどうやって確保するのかということでした。ですから今回の文化体育施設利用放課後子ども教室事業はまさに「渡りに船」でした。

今年、放課後子ども教室が開かれ夏休みに子ども達が参加できるメニューが大きく増えたこともあり、きょろパスは約４００枚、前年の２倍以上の発行数となりました。このことからも昨年に比べて子どもたちは確実に活動的になったと言えると思います。

◆ 子どもたちが地域と出会う「ふるさと雲南冒険バスツアー」

放課後子ども教室事業を活用して「きょろパス」を使う動機を強めるための企画を実施しました。夏休みの毎週木曜日に行う子ども達が地域の自然や人を体感できるバスツアーです。神話、食、歴史、自然などのテーマを決めて、５回のツアーを開催し、延べ約１００人が参加しました。市民バスのみを活用して実施したツアーが２回、残り３回は集合と解散時間を市民バスの時間を勘案して計画しました。最初のツアーこそ実際に市民バスに乗って来る子どもは皆無でしたが、ツアーを重ねるごとに市民バスでやってくる子どもが増えました。雲南市の子どもは公共交通機関に乗ることがほとんどなく、移動の手段は親に自家用車に乗せてもらうというのが当たり前になっています。それに対し自分で計画して目的地にたどり着くと言う経験は非常に新鮮で、そして、一本乗り過ごすと普通で１～２時間は待たなくてならないので、真剣に時刻表とにらめっこします。このことだけでも子ども達の生きる力が鍛えられたと思います。ツアーでは地元のガイドが遺跡や自然など実物を見ながらを熱い思いをもって説明してくれます。現地で本物と出会った経験によって、ふるさとは子ども達の心に深く焼きついたのではないでしょうか。

また、保護者の参加も多くありました。雲南市は平成１６年に６カ町村が合併してできたばかりの自治体なので、ほとんどの保護者も自分の出身の町以外は馴染みがなく、広くなったふるさとの素晴らしさを親子で発見できたことは非常に素晴らしいことだと思います。

しかし、企画する側としては毎週行うバスツアーは結構大変でした。ガイドを探し、交渉し、打合せをし、危ない所は無いかと下見みを行い、また、市民バスの時間が決められているので制限も多く、時間をどう使うのか…とやっていると直ぐに一週間が来てしまう感じでした。

◆　学校と地域の連携による「大東よいとこウォーキング大会」

９月に大東小学校から６年生の総合的な学習の時間の内容について相談を受けました。担任の先生から「大東のよさ（環境・歴史に関するもの）」をテーマに学習したいと聞いて、二つの案を提案し、採用されたのが「ウォーキングマップづくり」でした。子ども達が８つの班に分かれ、「大東のよさを感じる場所（よいとこ）」を調べ、コースを検討し、マップにまとめ、発表するというものです。そして、校内での成果発表だけで終わっては勿体無いと、放課後子ども教室を利用して、広く地域の方に呼びかけてウォーキング大会を実施しました。

１２月９日（日）、小雨のちらつく生憎の天気にも関わらず約１００名の参加があり、児童が作成した８つのコースに分かれて、約２時間のウォーキングを楽しみました。途中、「大東のよいとこ」についての説明やクイズの出題があり、児童の学習の成果を参加者がしっかりと感じることができました。子ども達にとっても学習を通じて作ったコースを地域の方と楽しく歩いたこの企画は、達成感はもとより、ふるさとへの愛着が深まる機会になったように思います。この後、２月には市のウォーキング大会も今回作成したウォーキングマップを使って実施され、そのときも児童が参加し、「大東のよいとこ」の説明をして、ウォーキング協会の会員を楽しませてくれました。

◆　成果と今後の展開

「子どものために何ができるか」という視点で、放課後子ども教室事業は絶大な力を発揮しました。子ども達に多様な体験や出会いの場を与え、また、それに関わる地域の大人を鍛え、交流を増やしました。一年目の成果としては十分満足できるものであったように思います。

来年度の展開として考えているのは、学校教育へ入っていただける地域人材の組織化です。市では「雲南市こども応援団」として、会員登録を始めることにしていますので、放課後子ども教室の講師の方にも会員になっていただき、社会教育のステージから学校教育の現場へ入っていってもらえるようにしたいと考えています。

また、学校との連携事業も更に増やしていく必要があると考えております。上述の大東小学校でのウォーキング大会のような活動は昨年においては特殊なものでした。しかし、子どもにとって地域で学ぶことは大切なことであり、また、学校という素晴らしい素材を地域に活かしていくことも、もっと在って然るべきものです。

来年は文部科学省の学校地域支援本部事業が始まると聞いていますが、その中で放課後子ども教室は地域と学校を繋ぐ役目を今以上に期待されます。そして教育支援コーディネーターとしても「子どものために何ができるのか」、この言葉を胸に、目的をしっかりと持って、この事業と向き合っていきたいと思います。

（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員・教育支援コーディネーター）

文化体育施設利用放課後子ども教室の取組みを振り返って

未来を担う子どもたちの心と体の育成に、人や物、自然との関わりやその体験が、非常に重要な役割を果たしていることが実証されている。しかし、子どもたちが育つ環境や、子どもたち自身の生活は様変わりし、多くの調査では週末や休みの日の遊びとして室内で TV やビデオの視聴、ゲームを行う、漫画を読むなど、比較的個人的で静的な遊びの割合が増加していることが報告されている。

こうした中で家庭や地域の教育力に対する意識が高まり、さらに子どもに関する様々な事件や犯罪の多発から、子どもたちの安全や安心に対する意識も高まってきた。

このような背景から、雲南市では平成 16 年度から『子どもの居場所づくり活動・放課後子ども教室』を展開され、主に平日の学校などでの活動として始まり、すっかり定着し、高い評価を受けている。

今回、私たちはこの事業が実施されない土曜日、日曜日、祝祭日、夏休みや冬休みなどの休日を対象として、市内の文化施設、体育施設を開放して行う『雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室』を放課後子どもプラン推進事業として実施することとした。

新しい教室は『感（性）育』『歩（行）育』『健（康）育』『徳育』をテーマに掲げ、『文化』『伝統文化』『スポーツ』『地域を知るための活動』『受け継がれてきた遊び』『趣味』など、より専門的な施設の特徴を活かし、より熟練したなスタッフが指導を行う魅力あるプログラムの提供を心掛けた。（特にこれらのプログラムは子どもたちにも親しみやすいよう『わくわくプログラム』と命名）また、それぞれのプログラムは保護者が一緒に参加することも積極的に推進した。すなわち、わくわくプログラムと雲南市との協働により、『すべての日にちにおいて』『比較的手軽に参加できるものから専門的なものまで幅広く』さらに『保護者と共に過ごすこともできる』プログラムを提供することに配慮してきた。

こうして始めた『わくわくプログラム』では、遊びや学びの中に『体験』『挑戦』『発見』する子どもたちの姿を見ることができた。そしてここには専門的な知識や技術の習得の中に、大人と子ども、あるいは子どもと子どもの『人と人の交流』があり、人との関わりや関わりの中で自分を表現し伝える子どもたちの姿があった。中でも保護者以外の大人との関わりに乏しい今日において、多くの経験豊かな大人と触れ合う大変貴重な機会になっている。

また、教室運営においては、例えば『ふるさと雲南キョロキョロ探検パスポート（通称「きょろパス」）」など、市が実施する事業とのタイアップも積極的に推し進めた。月を追うごとに『きょろパス』を活かす公共交通機関のバスで会場にやってくる子どもたちの姿が増え、同時に『きょろパス』の発行枚数も前年の 2 倍以上になるなど、相乗効果が得られたことも関係者を喜ばせた。

さらに特筆すべき点として、『わくわくプログラム』が地域で認知されるにつれ、新しいプログラムが逆に地域から提案され始めたことが挙げられる。この場合、特に地域の人材を有効に活用するケースが多く、私たちも知らなかった専門家や名人が多数在住して

いらっしゃることに気付かされた。こういった方々の協力と新しいプログラムへの提案が地域から生まれたことは、事業の幅を広げるだけでなく、私たちに対するエールとして、今回の事業を進めていく上で大きな力となり、同時に自信を深めることにも繋がった。

加えて、地域の人材活用を基盤としながら、文化、スポーツ両面においての専門的見地やネットワークを生かし、レスリングの金メダル最有力候補である伊調姉妹に代表されるように普段接することのできないプロのアーティストやアスリートから指導を受け、あるいは演奏や演技などを鑑賞し、交流する機会も提供した。TV の中の憧れのアーティスト、アスリートとの触れ合いは、子どもたちに大きな夢と希望を与え、そして挑戦する気持ちを育成することに繋がった。

他方、今回の事業は雲南市内の複数の文化・体育施設を利用したが、市内全体から見るとその開催場所には偏りが見られ、施設のない地域からも教室実施要望が寄せられたこと、参加する子どもたちにやや固定化が見られたこと、中には教室の開催を知らない子どももいたこと、公共交通機関の少ない地域だけに、施設の近隣に住む子どもの他は送迎など保護者の協力なしには参加できないことなどを抽出することができた。これらの問題点を明確化したこともまた大きな収穫であったといえる。

様々な思いを胸にスタートした事業であるが、運営する私たちもまた 1 年生である。そして提供するプログラムも、事実この期間中にさえ刻々と変化し、より楽しく、より参加しやすい、さらに魅力的なものへと移り変わってきたように、まだ多くの改善の余地があり、さらに多くの人材も地域には存在している筈である。参加した子どもたちのキラキラと輝く笑顔や一生懸命取り組む真剣な眼差しは本物だ。方向に間違いはないと確信し、自信を持ち、学び、問題点の解決に知恵を絞り、常に検証し、より成熟したプログラムを提供することが私たちの使命である。一朝一夕では成し得ない『感育』『歩育』『健育』『徳育』の達成のため、この努力を惜しまず継続していくことが必要である。

あっという間に過ぎた 8 ヶ月であったが、この間実に 347 教室を開催し、延べ人数 4,400 人の子どもたちの参加を得て、ひとつの区切りを迎え、多くの成果を得ることができた。

この間大きな事故もなく無事に実施できたことは、何よりも保護者、学校、地域、行政、その他関係機関の方々の協力があってのことにほかならない。この場をお借りして深く感謝するとともに、今後の協力についても引き続いてご依頼し、平成 19 年度の事業のまとめとしたい。

最後に、本報告書並びに雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会に対する皆様からのご意見、お問い合わせをお待ちしています。

連絡先　〒699-1105
島根県雲南市加茂町宇治 303 番地
雲南市加茂文化ホール ラメール内
雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会
TEL 0854 - 49 - 8500　FAX 0854 - 49 - 6200

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会

事務局長　陰山　義広